

# ふじみの



No.40

東京農大畜友会



## 巻頭言

古川 徳

「一月は行く、二月は逃げる、三月は去る」と言われるように早いもので今年もすでに二ヶ月以上が過ぎ、一年で最も心地好い季節が巡ってきました。大学では退職される先生や四年生の皆さんとの悲しい別れと新しく迎える先生や新入生との嬉しい出会いのある悲喜こもごもの季節でもあります。

四年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げますとともに、ここに至るまでにご両親をはじめ、社会の多くの人たちから受けた恩恵を忘れることなく、健康に留意され、社会のより良い発展のために実力を遺憾なく発揮されることを期待いたしております。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい大学生活に期待と不安の入り混じった気持ちで一杯のことと思います。まず考えていただきたいのは、これからは「生徒」でなく、「学生」であるということです。「生徒」という言葉には、学校が与えてくれる教育を受ける者という受身の意味が含まれていますが、これに対して「学生」は自ら進んで学業を修める者で積極的な姿勢を持つという意味が含まれ

ています。つまり、大学への入学にあたり考えてきた目標に向う過程で疑問点を放置せず、自ら調べ、知りたいと努力することが目標達成に必要なことでしょう。四年後には自らの努力に対して満足して卒業されることを願っております。

この一年を振り返って見ますとBSE、SARS、高病原性鳥インフルエンザ、鯉ヘルペスなど動物に関する情報が新聞、テレビなどで大きく取り上げられました。これは一般の人々が従前にもまして健康や食の安全について関心を持っていることを示すものです。また、食の安全保障はもはや日本国内のような狭い地域だけで考えるのではなく、地球規模で考えなければならないことを示すものです。若い皆さんの勉学と努力によってこれらの問題が解決されることを期待いたしております。

終わりに当たり本誌に寄稿いただいた多くの方々、編集の労をとられた関係各位に感謝申し上げます。

## ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長 後藤隼人

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告を記載しています。今年は、厚木キャンパスに移転し早くも四年が経ち、「厚木キャンパス」の土台も形成されつつようやく落ち着いてきた様に思います。今後まだまだ新しく変化しつつありますが、その中で学生一人一人が自ら感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。ぜひ、隅々まで御覧いただけたら幸いです。

目次

野生動物学研究室

ふじみの寄稿原稿

巻頭言

古川 徳

ふじみの発刊にあたり

後藤 隼人

同窓会だより

同窓会会長あいさつ

伊藤 澄磨

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会 便り

渡邊 誠喜

研究室だより

- 家畜繁殖学研究室
- 家畜飼養学研究室
- 家畜学研究室
- 畜産物利用学研究室
- 家畜育種学研究室
- 家畜生理学研究室
- 家畜衛生学研究室

畜友会だより

- 平成十五年度畜友会事業報告
- 平成十四年度畜友会決算報告
- 特別会計収支報告
- 平成十五年度畜友会予算
- 特別会計予算
- 平成十五年度畜友会役員
- 第四回厚木キャンパス収穫祭

集う学友

- 笑顔でいられること
- 農大生活3年間を振り返って
- Thailandレポート
- 進め！ボランティア部。

井上 武  
西脇 充  
渡邊 忠男  
佐藤 光夫  
安藤 元一

4年 本間 彩子  
3年 石毛太一郎  
2年 山本 茜  
1年 関 綾乃

第一二回体育祭事業報告及び結果報告  
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第四回厚木キャンパス収穫祭  
第一二回体育祭各部門委員長より

- 明るく・楽しく・元気よく  
統一本部委員長 3年 後藤 隼人
- ステージに・・・「ありがとうございました！」  
特別企画委員長 3年 浅野 陽子
- 農大生!!  
宣伝隊長 3年 石井 淳子
- みんなの力  
御輿隊長 3年 藤沼 和秀
- 懸命に  
体育祭委員長 3年 菅原 佳宏
- 畜産万歳!  
槽裝飾委員長 3年 飯塚さやか
- 裝飾ギャルズ☆  
研究棟アート委員長 3年 尾茂田明菜
- 家畜苑  
家畜苑委員長 3年 山川 将弘

編集後記

3年 石井 淳子

### 同窓会だより



### 同窓会会長あいさつ

畜産学科同窓会

会長 伊藤 澄 磨

昭和二十四年に設置された畜産学科は今年で五十五年の月日を経ることになりました。これまでの間、昭和二十八年の第一期生の卒業以来、延べ六、八二五名の同窓生を世に送り出し、それぞれが国内、外を問わず畜産業ならびに関連産業において活躍されています。

本会は、昭和六十三年に畜産学科創立四十周年を迎えた折、会員相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に寄与することを目的に設立されました。以来、会員の皆様のご協力により先のような事業を着々と展開しております。

- 一、畜産学科への援助
- 二、新入会員および卒業祝賀会への援助

### 畜産振興会



### 東京農業大学畜産振興会 便り

東京農業大学畜産振興会

会長 渡 邊 誠 喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、早十三年が経ち本誌に便りを執筆する時期となりました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究所畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されました。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっては、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとな

三、会員名簿の追補版の発行

四、同窓会報の発行

五、総会および親睦会の開催

六、役員会および常任幹事会の開催

昨年度は、二二二名の同窓生が誕生し、追補版の会員名簿を発行しました。また、三月二十一日に行われた卒業式において加藤博雅君に第二号の同窓会優秀卒業論文賞の表彰、体育祭応援用和太鼓の寄贈、設立十五周年記念同窓会名簿の発行と送付、講演会（畜産環境技術研究所長 古谷 修氏による養豚における環境負荷物質の低減技術の現状）などの事業を行いました。卒業祝賀会においては卒業式終了後の学科・畜友会・同窓会の共同主催による卒業祝賀会が執り行われ、長い時間教職員、友人達と談笑され満足されたことと思います。

本誌の発行は平成十五年度の卒業式当日と思えます、卒業生の皆さんご卒業誠におめでとうございます。本日から同窓会会員とされる訳ですから、本学科で学ばれたことに胸を張り、そして共に過ごした仲間、先輩、後輩と生涯連絡を密に取り合いながら各界でご活躍くださいと思います。そのケルンとして同窓会をご活用ください。

準会員である新入生を含めた在校生諸君は、生涯の友、恩師に恵まれるよう本会を活用され、恩恵を受けていただくと共に文武両道の精神で勉学、課外活動に活躍され、悔いのない学生生活を通じて幅広い人格を形成されますことを祈念いたします。

っております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二、四年次生の各学年から一名ずつ計三名姉妹校留學生並びに渡米農業実習生への交通費の一部支給、優秀卒業論文賞を毎年一名、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対する表彰を実施しております。特に学生による論文発表や学会での口頭発表は年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また近年、社会の経済不況により学費納入が困難な学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成十年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第三期の学科学生ならびに第一期の大学院生（博士前期課程）が卒業いたします。しかし移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにあり、厚木キャンパスは学生のみと云う状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリヤマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑にも参加するなど学生に親しまれております。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十一年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本

年度で六号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は振興会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことにより、その後、逐次拡大してきた事業を遂行するための資産は、

- 一 東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
- 二 賛助会員会費
- 三 一般寄付金
- 四 その他の収入

によって賄われておりますが、充実した事業の展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたし、振興会便りいたします。

### 研究室だより

#### 家畜繁殖学研究室

私達、家畜繁殖学研究室は、優秀な形質の家畜、家禽を効率よく増やす、繁殖方法の確立を最大目標といたします。百目鬼郁男教授をはじめ、門司恭典教授、桑山岳人助教授、佐藤光夫講師のご指導の下、大学院生8名、4年生30名、3年生29名が熱心に日々研究を行っております。

当研究室では繁殖生理に関する研究、人工授精ならびに受精卵移植に関する研究を行っています。

具体的には、

- ・ 生殖（受精・妊娠・分娩等）のリズムとホルモンに関する研究
- ・ 繁殖行動の内分泌支配に関する研究
- ・ 環境ホルモンの影響についての研究
- ・ 精子・卵子・胚の凍結保存に関する研究
- ・ 体外受精卵の受精から卵の発育までの培養の研究など、最先端の研究をしています。

日常の活動内容は、3年生は繁殖学の基本的な知識、実験方法や技術を身につけるとともに、当研究室で、飼養管理しているミニチュアブタ・シバヤギ・鶏をそれぞれの班に分かれて日常の飼育管理を行い、大学院生や4年生の研究や実験の補助をしています。

年間の主な行事は、4月の新入生歓迎会、年2回の納会や大掃除、収穫祭への文化芸術展・模擬店での参加、研修旅行（昨年は那須塩原へ）、卒業論文発表会、卒業生送別会などがあります。

毎日笑顔がたえない楽しく仲の良い研究室であり、お互いに協力し合いそれぞれの目標へと向かって努力しています。

#### 平成十五年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導 教員
稲葉 宏光	パーコール密度勾配遠心法により分離されたブタ精子の遠心条件による精液性状の違いについて	門司 百目鬼
岩下 智子	成熟去勢ウズラのクロアカ腺機能に対するテストステロンの影響	門司 百目鬼
大塚 健雄	ニホンウズラにおける排卵後の排卵時間と卵の卵管各部の滞留時間について	門司 百目鬼
落合 夏子	種卵の貯卵温度および季節変動による雌雄比についての実験	門司 百目鬼
片岡 千裕	シバヤギにおけるDES投与後の血中	門司 百目鬼

DESの消長および性ホルモン濃度の変  
化について 百目鬼

鐘撞 正和 牛における糞中および唾液中プロジェス  
テロン測定法の検討 佐藤

川満 大輔 雄ミニチュア子豚へのDES投与が生殖  
行動および造精機能に及ぼす影響 百目鬼

神崎 静香 ミニチュアブタの造精機能に及ぼす人為  
制御について 百目鬼

清原 里香 乳用牛における供用年数に関する調査 佐藤

幸崎 理絵 ミニチュアブタにおける簡易採血法の検討 百目鬼

斉藤 由佳 家禽における同種間胚盤葉キメラの作出 百目鬼

酒井 梓 抱卵行動を人為的に中断させた岐阜地鶏  
母鶏の産卵率の変化 門司

榑原 勲 ミニチュア母豚の栄養状態が発情回帰に  
及ぼす影響 百目鬼

ける多精子侵入率の検討 百目鬼

原 真由美 ブタ卵管上皮細胞を用いたコンディショ  
ンメディウムがブタ胚盤胞の発生率およ  
び細胞数に及ぼす影響 百目鬼

本間 彩子 ミニチュアブタの微弱発情に伴う内分泌  
学的、生理学的諸性状について 門司

水野 昌代 シバヤギにおける帝王切開後の生殖機能  
の回復について 門司

横田 貴久 セイロン野鶏と岐阜地鶏雌より作出され  
たF1雌に対するセイロン野鶏雄の戻し交  
配の試み 百目鬼

淀川 久美 セイロン野鶏の復元に関する研究  
—特に性比について— 百目鬼

綿井 庸祐 シバヤギにおける黄体ホルモン腔内スポ  
ンジ法を用いた発情同期化法の検討 門司

村石 武史 二黄卵多産鶏における複黄卵の産卵成績  
について 門司

山田 千沙 ニホンウズラにおける右卵管発達の後世 百目鬼

佐藤 寛純 ブタ卵子成熟培地中のグルコース濃度が  
胚発生に及ぼす影響 百目鬼

佐藤 陽子 シバヤギにおける水酸化アルミニウムゲ  
ル(AC・AL)を用いた多排卵誘起処置法  
の検討 門司

鮫島 健一 黒毛和種における制限哺乳が発情回帰に  
及ぼす影響 佐藤

篠崎 友紀 鈍製発情を示すミニチュアブタにおける血中  
性ステロイドホルモン濃度の推移について 門司

田中 靖広 ミニチュアブタにおける持続性黄体ホル  
モンを用いた発情同期化法の検討 門司

田辺 薫 ブタ及びシバヤギ精巣からのライディッ  
ヒ細胞分離法の検討 百目鬼

名黒 藤志 ミニチュアブタ精巣細胞におけるDES  
添加の影響 百目鬼

畑中詠美子 雌シバヤギにおけるPGF2 $\alpha$ 合成阻害  
剤を用いた分娩遅延の検討 門司

林 武司 ブタ体外成熟卵子の化学的活性化法にお  
門司

代への遺伝性について 門司

家畜飼養学研究室

本研究室は、牛・豚・鶏などの家畜・家禽から、乳・肉・卵等の動物性食品を効率よく生産していくために、どのような飼料（飼料学）をどの位（動物栄養学）、どうやって（家畜管理学）与えるかを常に追求しています。さらに飼料の最終形態である糞尿の環境に及ぼす影響についても研究を行っています。これら全てを包含した学問が家畜飼養学です。さらに家畜飼養分野は現在、実験動物、野生動物、コンパニオンアニマルにも応用範囲が広がっております。

研究は、栗原良雄教授、祐森誠司助教授、池田周平助教授の指導のもとに、進められており、その成果は（社）日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会等において毎年発表されています。研究室の活動は、四月の新人室員歓迎球技大会から始まり五月の富士畜産農場での専攻実習と新人室員歓迎会、夏季休暇中には家畜管理実習（学外）、飼料成分分析実験、月一回のゼミ、十一月は収穫祭への参加（平成十五年度模擬店 カレーうどん、文化学術展―卵の不思議）畜産関連施設の見学を兼ねた研修旅行、二月は卒論発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会さらに、ゼミを定期的に月一回の予定で行っています。このような各活動を通し、室員の意思の疎通をはかるとともに団結を深めています。研究室では家庭的な雰囲気の中で規律を守り有意義な学生生活を送っています。卒業生の進路は、畜産関連農

場・実験動物関係・食料関係・食品関連等の民間会社、教員、公務員等への就職、自営（酪農・養豚・養鶏）と大学院への進学です。

平成十五年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導

天野沙治子 ラットの盲腸摘出がC.P・A.D.F・熱量の消化に及ぼす影響 池田

―飼育期間を十六週間に延長した場合―

安蔵 瑛子 採卵鶏における熱発生量の日内変動について 栗原

萩田 哲也 教育思想としての仮説実験実習 栗原

〔自然主義および児童中心主義との関係〕

尾崎 圭子 光環境（波長）が採卵鶏の卵質に及ぼす影響について 祐森

鈴木聡

尾澤 佳味 光環境（波長）が採卵鶏の産卵に及ぼす影響について 栗原

祐森

小野寺 恵 軽種馬の敷ワラから発生するアンモニアガスについて 栗原

金子 晋平 採卵鶏におけるビタミンA欠如飼料給与が産卵に及ぼす影響 栗原

池田

林 弘枝 野鳥の食性について 栗原

福山 智史 ラットの結・直腸におけるビタミンB12の吸収について 池田

祐森

房川 清志 成兎の消化試験における基礎飼料の検討 栗原

特に排泄糞中の標識物質（酸化第二クロム）の変動について

松本 純 成兎の消化試験における基礎飼料の検討 栗原

特に粗タン白質および粗繊維の消化率の変動について

村上 朋子 採卵鶏におけるビタミンA欠如飼料給与が組織・器官に及ぼす影響 栗原

池田

矢野雄一郎 い草を用いた堆肥調整時に発生するアンモニアガスについて 池田

祐森

吉田 博則 い草を用いた堆肥調整について 池田

祐森

郡司 昌孝 乳牛の給与飼料へのアミノ酸添加が泌乳に及ぼす影響 栗原

佐藤

駒板 明海 ラットの食性に関する研究 祐森

池田

酒井 孝徳 アミノ酸バランス飼料の制限給与が肥育豚（後期）の排泄物から発生するアンモニアガスに及ぼす影響 栗原

池田

櫻井 義久 EIA法による乳用牛の唾液コルチゾール濃度測定 of 再検討 栗原

佐藤

清水 孝正 採卵鶏におけるビタミンA欠如飼料給与が孵化に及ぼす影響 栗原

池田

杉浦 洋 豚の肥育後期におけるアミノ酸バランス飼料の制限給与が消化率に及ぼす影響 栗原

池田

中田 吉家 豚の肥育後期におけるアミノ酸バランス飼料の制限給与が体脂肪蓄積に及ぼす影響 池田

鈴木伸

中津 理恵 採卵鶏におけるビタミンA欠如飼料給与 栗原

池田



津久井耕治 乳牛の給与飼料へのアミノ酸添加が排泄物中の窒素に及ぼす影響 栗原 佐藤

中山 逸枝 EIA法による乳用牛の唾液コルチゾール濃度の日内変動について 栗原 佐藤

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、萩原國威講師、西脇充講師の御指導のもと、四年次生二十八名、三年次生二十九名、計五十七名の室員で日々の研究活動を行っています。本研究室では、学内外の実習・調査を通し、家畜生産現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察を行い、研究を行っています。研究対象は家畜・家禽・堆肥・伴侶動物など、多岐にわたっております。

現在の主な研究課題は

- ・ダチョウの孵卵・孵化・育雛・行動等に関する研究
- ・乳用綿羊を用いた季節外繁殖に関する研究
- ・有機物資源の堆肥化と利用に関する研究
- ・伴侶動物に関する調査・研究

などを行っております。その他に、年間行事として、新入生歓迎会・研修旅行・納会があります。又、各研究班によるゼミも行っております。

今年で設立七年目を迎え、今後も各人の自主性を尊重するとともに、研究室全体の協調性も培ってゆけるよう全員で精進してまいります。

平成十五年卒業論文題目

氏名 論文題目 指導員

新井信太郎 万田酵素を用いた牧草の生育・生産に関する研究 大谷

若崎 千草 完熟堆肥の脱臭効果と脱臭した堆肥の品質に関する研究 大谷

片桐 由貴 長野県飯田市における農村型グリーンツーリズムの展開 大谷

城井 孝文 バイオガスプラントから産出される資材の肥料効果  
—消化汚泥の施用によるスイートコーンの生育並びに品質について— 大谷 萩原

木野 敦子 ダチョウの育雛環境に関する研究 西脇

小林 祐樹 ダチョウの育成に関する研究  
—特に放牧における発育について— 西脇 萩原

小林 祐介 繁留牛舎での外部環境の違いによる乳牛の行動に関する研究 萩原

櫻井 直剛 ダチョウ卵の物理的特長に関する研究 西脇

佐藤 雅行 関東地方における新飼料米数品種の生産性に関する研究 大谷

七字 奈美 家畜糞の堆肥化に羊毛を副資材として添加した腐熟効果 大谷

田辺 雅美 ダチョウの発育に関する研究  
—特に餌付け時雛の体重別に見た発育について— 西脇 萩原

谷崎絵里嘉 乳用綿羊種の産乳性と乳質に関する研究  
—北海道美深町における実態— 大谷

常山 晴代 羊毛を添加した堆肥の腐熟効果に関する研究  
—調整堆肥施用による幼植物の生育調査— 大谷

豊村弘一郎 産卵鶏飼料の蛋白質水準の差異が卵質に及ぼす影響 西脇

中島 有美 ダチョウの色彩感覚に関する研究 西脇 萩原

濱 麻里子 綿羊の内部寄生虫に関する研究  
—舎内飼育における駆虫前後の寄生虫卵の経時的消長— 大谷

古川 嘉人 魚介類における未利用資源に関する研究 西脇 萩原

北條 義人 黒毛和牛の種雄牛別における肥育素牛の市場成績に及ぼす影響 萩原

堀 健太郎 ダチヨウ離の成長過程における血液性上及び血清成分に関する研究 西脇

本多 栄明 廃食用油の添加が堆肥調整に及ぼす効果 大谷

前田 紘志 羊の容姿の変化が社会行動に及ぼす影響 大谷

増田 幸志 綿羊糞で調製した堆肥の品質とその利用に関する研究 大谷

嶺岸 尊 毛肉兼用綿羊種における季節外繁殖の基礎的研究 大谷

矢澤 沙織 堆肥調製過程において腐熟度の異なる副資材(完熟・未完熟堆肥)添加が臭気発生量におよぼす影響 大谷

安田光太郎 輸送におけるプロイラーの生理的变化に関する研究 西脇

芳竹 宣幸 バイオガスプラントから排出される資材の堆肥化と利用に関する研究 萩原  
―戻し堆肥を添加した堆肥調製過程にお

ける腐熟度合いと各種臭気発生量の関係について

稲泉 作知 休耕田を利用した養豚の飼料化体系の確立―肥育豚に対する玄米添加飼料の給与効果― 大谷

斉藤 出 鶏卵の特殊卵における卵質に関する研究 西脇

出町 明香 都市における畜産の現状と今後のあり方 大谷

西脇

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の松岡昭喜教授をはじめ、渡邊乾二嘱託教授、古川徳教授のご指導のもとに大学4年次生26名、3年次生27名の室員で構成されており、それぞれに活発な活動を行っております。

具体的には、乳、肉、卵に含まれる各成分の化学的、物理的特質ならびに栄養、生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究し、食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発等に取り組んでおります。  
年間の主な活動としては、週1回の食品に関するゼミナール、新入生歓迎会、乳酸飲料、ソーセージ製造実習、ハム、スモークチキンの収穫祭での販売、研修旅行、卒業論文発表会等があります。

平成十五年卒業論文題目

氏名 論文題目 指導員

池田健太郎 リゾチームとナイシンの併用による食品渡邊  
有害菌の抑制効果

石井 康太 ソーセージにおける香辛料の抗菌活性 松岡

市川 拓也 飼料米の給与が肉豚の化学的組成に及ぼす松岡

す影響

市川 方啓 生ハムの有害常在菌に及ぼす粉末くん材松岡  
の効果

伊藤知江子 ケフィール摂取が腸管細胞のDNA損傷古川  
に及ぼす抑制効果

上野 智保 豆乳チーズ製造法の検討 古川

大貫みずき オボムコイドのアレルゲン性の低減化 渡邊

大屋 直子 記憶学習能に及ぼす乳製品摂取の影響 古川

向後 有貴 豆乳ヨーグルトのカルボニル化合物について 古川

小佐古敏裕 発酵卵製品製造の検討 渡邊

小林 宏美 腸管細胞のDNA損傷に及ぼす発酵豆乳古川  
の抑制効果

佐川 夏樹 ケフィール摂取が胃壁細胞のDNA損傷古川  
に及ぼす抑制効果

佐藤 純 抗酸化能をもつ乳酸菌の検索に関する研渡邊  
究

菅沼 直人	チーズ熟成中に生じる苦味ペプチドの低減化	古川
鈴木 佳子	赤色ミオグロビン誘導体形成能を有する乳酸菌の検索	松岡
田賀 力	かぼちゃヨーグルトの開発に関する研究	古川
竹村 圭太	低温発酵性乳酸菌の検索と発酵肉製品への利用	松岡
鳥居紗綾香	チーズ熟成中に及ぼす各種食塩の影響	古川
中嶋 経充	プロバイオティクス乳酸菌の発酵肉製品への利用	松岡
布川 恵子	豆乳発酵抽出液の抗酸化能について	古川
野畑万里子	食品有害菌に対するリゾチムと乳酸菌生成物の相乗効果	渡邊
橋本 菜摘	乳酸菌による卵白タンパク質の抗酸化能発現	渡邊
福嶋麻衣子	乳酸菌の生産するバクテリオシンに関する研究	渡邊

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学を柱に広範囲な見地から研究活動が実施されています。

当研究室は、天野卓教授をはじめ、花田博文教授、野村こう講師、立脇直子副手の指導の下、大学院生10名、4年生28名、3年生28名によって構成されています。室員全員が各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。家畜（ウシ・ヤギ・スイギュウ）や家禽を供試動物として、電気泳動による血液蛋白型の研究、毛色や抗病性に関する研究、家畜の細胞遺伝学的研究、DNA情報を利用して母系や父系の祖先を探る研究、新たな形態学的手法を利用した鶏の家畜化や品種分化に関する研究等が行われています。当研究室では毎年、新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員同士の親睦を深めています。また、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例室員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会への発表などが精力的に行われています。

平成十五年卒業論文題目

氏名	論文題目	指導員
村上友紀子	フロースンヨーグルト中の乳酸菌の凍結障害に及ぼす多糖類の効果	古川
山崎 有紀	酵母による発酵卵製品の製造	渡邊
山本 由紀	発酵による豆乳の抗酸化能の変化	古川
駒形 安宣	ドライソーセージ中の常在有害菌に対する発酵卵白の効果	松岡
早野 瑞恵	飼料米の給与が肉豚の屠体形質に及ぼす影響	松岡
荒木 元啓	血液蛋白型支配遺伝子によるスイギュウの系統遺伝学的研究	野村
市原 佳恵	ミトコンドリアDNAのD-loop情報によるニワトリの系統遺伝学的研究	野村
伊藤 寿	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村
植田 圭介	ヤギのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	野村
小椋 研介	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村
加治佐 龍	Y染色体遺伝子情報によるウシの系統遺伝学的研究	野村
川島 秀行	ミトコンドリアDNA情報によるヤギの系統遺伝学的研究	野村
桐生 茂昌	ウシおよびバイソンのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	野村
栗田 美帆	血液蛋白型支配遺伝子によるウシの系統遺伝学的研究	野村

桑野 宏	頭骨画像情報解析による家鶏の品種分化に関する研究	野村 天野
品川 睦明	肋骨数ならびにその構成による家鶏の品種分化に関する研究	野村 花田
杉村 亜希	イタリアスイギュウのE DNA全塩基配列の解析	野村 花田
五月女浩之	血液蛋白型支配遺伝子によるウシの系統遺伝学的研究	野村 天野
田島 亮	羽装の色差比較に基づく野鶏と日本鶏の分類に関する研究	野村 天野
近岡 宏介	Y染色体遺伝子情報によるウシの系統遺伝学的研究	野村 天野
千葉 一喜	ウシおよびスイギュウの遺伝子情報に基づく系統遺伝学的解析ソフトの構築	野村 花田
津田久美子	体細胞クローン牛の細胞遺伝学的正常性の検討	野村 花田
手島隆一郎	家畜の微量サンプルからのDNA抽出に関する基礎的研究	野村 天野
中野 将史	ミトコンドリアDNAによるスイギュウ	野村 天野

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師のご指導のもと、大学院生9名、学部4年次生28名、学部3年次生28名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリ・ホロホロチョウに関する研究、③ウシに関する研究、④その他の動物に関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションの変化による血液性状の変動、赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究などを行っています。②においては、抗原に対する抗体産生能・アポトーシス・モノクローナル抗体といった免疫学の基礎となる研究、組織適合性複合体(MHC)の分子遺伝学的・免疫学的解析、TLR遺伝子の解析、HSP70遺伝子の解析、ニホンウズラとニワトリの属間雑種に関する研究を行っています。③においては、ビタミンA代謝における諸々の現象に関する研究、不死化細胞の染色体解析などを行っています。④においては、マメジカ及びアライグマのDNA多型に関する研究やチリフラミンゴの性染色体個体変異に関する研究が精力的に行われています。

本研究室における日々の活動を紹介しますと、3年次には生理学に関する基礎的な実験の技術を身につけるため

藤野 呂枝	ヤギのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	野村 花田
藤村 和矢	ミトコンドリアDNA情報によるヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
二見 圭祐	家畜の細胞遺伝学的研究手法の検討	野村 花田
船越 亮太	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村 花田
星野 雄大	河川型スイギュウのE DNA全塩基配列の解析	野村 天野
榎谷 晃明	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
水野 豪紀	脊椎骨数ならびにその構成による家鶏の品種分化に関する研究	野村 天野
山本久美子	マイクロサテライトマーカーによるニワトリの系統遺伝学的研究	野村 花田
横川 暁士	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの系統遺伝学的研究	野村 天野

に講義・ゼミ・実験実習を行うと共に、実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には前述した研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っています。院生は、自分の学位論文のテーマに対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化芸術展・模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。なお、平成15年度の卒業論文題目は以下の通りです。

平成十五年卒業論文題目

氏名	論文題目	指導員
荒井 理絵	正常血清中の濃度の異なるニホンウズラにおけるペプチドグリカン(PG)に対する免疫応答能の比較解析	原
荒井 良子	ニホンウズラとニワトリの属間雑種の半澤Coja II β およびBL β 遺伝子座由来mRNAの解析	半澤

安藤 竜太 ウシ甲状腺・肝臓・腎臓に関する免疫組織学的解析

半澤 吉田

池田 知隆 モノクローナル抗体によるニホンウズラ T細胞表面抗原の解析 半澤 原

伊藤 俊晶 ウマ赤血球の浸透圧脆弱性に関わる諸要因の解析 半澤

岩淵 文典 分娩および成長に伴うウシ血漿中のビタミンA群濃度の変動 半澤 吉田

岡 祐理子 ニホンウズラ♀とニワトリ♂との属間雑種のMHC class IIβ鎖遺伝子のサザンハイブリダイゼーション解析 半澤

落合 卓真 高温環境下におけるニホンウズラ熱ショックタンパク質(HSP70)の発現量に関する研究 半澤 吉田

小川 法子 神奈川県下に生息する帰化アライグマの地域的多型性 半澤 吉田

加藤 晃裕 不死化ウシ卵管上皮細胞の染色体の解析 半澤 吉田

久保 良美 ニホンウズラの正常血清IgG濃度による高・低両方向への選抜とその遺伝性 半澤 原

初山 恵 正常血清IgG濃度の異なるニホンウズラにおけるT抗原に対する免疫応答能の比較解析 半澤 原

柳澤 拓也 ニホンウズラMHC(MhcCoja)クラスI領域の構造解析 半澤

若菜 慶子 ニホンウズラの発生能とアポトーシスとの関係 半澤

大塚 佑笑 ニホンウズラにおけるヤギ赤血球に対する抗体産生能と血清中IgG濃度の推移 半澤 原

田中 政之 ニホンウズラMHC(MhcCoja)領域におけるcDNA多型解析およびこれと属間雑種(ニワトリ♂×ウズラ♀)発生能との関係 半澤

村磯 雅乃 乗用馬赤血球性状のモニタリング 半澤

室井 邦仁 分娩および成長に伴う牛血漿中のRBPおよびTTR濃度の変動 半澤 吉田

吉田 裕祐 ウェスタンブロット法によるBACクロソンの解析 半澤

佐伯 勇一 モノクローナル抗体によるニホンウズラB細胞表面抗原の解析 半澤 原

白倉 直美 チリフラミンゴにおけるW染色体CHD領域の個体変異 半澤 原

鈴木 誠二 ニホンウズラ各閉鎖系統における正常血清IgG濃度の差異 半澤 原

富田 裕子 マメシカのDNA多型に関する基礎的研究 半澤

中村 恭代 ニホンウズラの腸内細菌叢の構造解析 半澤 原

藤木 大士 ニホンウズラおよびホロホロチョウのHSP70cDNAのシークエンス解析 半澤 吉田

堀尾 有可 成熟培養下のウマ赤血球系幹細胞に発現する数種遺伝子の基礎解析 半澤

真原奈保子 ニホンウズラのTLR遺伝子の解析 半澤 原

村上 絢子 ニホンウズラMHC(Mhc Coja)領域の多型Markerの検索 半澤

### 家畜衛生学研究室

わが家畜衛生学研究室は、室長の近江助教教授をはじめ、渡邊教授、井上教授のご指導のもと、大学院五名、研究生一名、四年生二十七名、三年生二十九名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生でありましたが、最近では、「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物(コンパニオンアニマル)の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では、模擬店で「しし汁」を出展し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会等があり、室員の団結を深め、各々が目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行っています。

なお、平成十五年年度の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成十五年卒業論文題目

氏名 論文題目

指導  
教員

伊奈 幸恵 豚疥癬の診断…特に虫体の検出方法について 近江 鈴木

犬飼 啓史 伴侶動物(犬)の尿石症に対する処置方法について 近江 西脇

及川奈緒子 反芻獣の糞便より検出された寄生虫卵の形態的観察 近江 西脇

大畑 敬一 ニホンライチョウに寄生が認められた住血原虫について 渡邊

荻原加津子 歩行困難を認めた高齢犬の処置法について 近江 西脇

奥田 照幸 歯肉炎発症犬の処置法について 近江 西脇

小澤 朋弘 ダチョウの鶏ニューカッスル病ウイルスワクチンに対する対応 渡邊 西脇

小野塚正樹 動物の体表に認めた外部寄生虫の形態観察 近江 荻原

中田 雄記 痒覚を主徴とする豚の皮膚疾患に対する漢方薬の応用 近江 鈴木

中山 俊介 肥満犬の減量法…特に運動との関係について 近江 西脇

野口 朋大 豚腎臓株化細胞による継代が鶏ニューカッスル病ウイルスの病原性遺伝子に及ぼす影響 渡邊

松本 裕子 愛玩鶏における消化管内寄生虫の寄生状況 渡邊 西脇

門田 修子 動物よりの採取物の臨床細菌学的検査 近江 渡邊

矢野 京子 鶏コクシジウム原虫と大腸菌との混合感染がホロホロチョウに及ぼす影響 渡邊 西脇

吉野 広道 豚回虫人工感染豚に対する駆虫法の検討 近江 高崎

小川 光之 豚サーコウイルスに対する消毒剤の検討 渡邊

土屋由貴子 実験動物舎(犬)の衛生…特に悪臭対策について 近江 渡邊

山口 恵子 イヌおよびネコノミが保有する細菌検査 近江 渡邊

小原 朋 日本猿の糞便より検出された寄生虫卵の形態的観察 近江 渡邊

甲斐田雪苗 小笠原諸島に生息するヤギの糞便より検出された寄生虫卵の形態観察 近江 渡邊

白石 和弘 豚回虫卵の培養試験 近江 鈴木

杉本 将人 動物の体表に認めた外部寄生虫の駆除法について 近江 荻原

高木 香苗 富士畜産農場飼育採卵鶏におけるサルモネラ検査成績 渡邊 西脇

高島 加奈 富士畜産農場豚舎内より分離したブドウ球菌の薬剤の感受性について 渡邊

高橋 淳子 鶏コクシジウム原虫とクロストリジウム属菌との混合感染がホロホロチョウに及ぼす影響 渡邊 西脇

寺沢 正明 歯肉炎発症犬の臨床細菌学的検査 近江 渡邊

豊田 岳大 豚の皮膚疾患に対する処置法の検討 近江 鈴木

野生動物学研究室

本研究室は土屋教授、安藤助教授、小川助教授の指導のもと、室員がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。

我々は家畜の祖先である野生動物の分類や行動、生態学的な研究を行うため、フィールド調査(サンプルの捕獲や生態行動観察等)を行っている。また、研究室で動物を飼育し、繁殖、生長などに関する研究や、細胞遺伝学のおよび分子遺伝学的な研究を行っている。

研究の対象は、モグラやコウモリ、ヤマネ、ネズミ類などの小型哺乳類、ネコヤリス、ムササビ、テン、アナグマなどの中型哺乳類、シカなどの大型哺乳類である。また、近年日本の生態系に影響を及ぼしている外来種のアライグマやハリネズミ、ミシシッピアカミミガメなども研究対象としており、他にもウズラ、ホロホロチョウ、スズメ、ヒドリガモ、サギ類などの鳥類の生殖や生態といった幅広い研究を行っている。

これらの研究を通して、生物資源として重要な野生動物の種の保存、および特性の解明を目指している。

平成十五年卒業論文題目

氏名 論文題目

指導  
教員

相原かほる 鳥類の人慣れ現象

安藤

東 克憲 厚木市内における都市化とモグラの分布 安藤

岸 みずき 飼育下におけるノネズミ類5種の行動の土屋  
比較

阿部 純 野ネズミ類の行動観察に基づく環境教育 土屋  
プログラムの作成

小林 浩子 糞便検査によるヒドリガモ (*Anas penelope*) 小川  
の寄生虫相

市川 望久 東京農業大学厚木キャンパス周辺の中型 安藤  
野生哺乳類とノネコとのかかり

清水 雄大 南アメリカ産およびユーラシア産げっ歯 土屋  
類の系統進化に関する分子生物地理学的  
研究

岩渕 篤史 スズメ (*Passer montanus*) と人との距離 安藤  
にみる人慣れ現象

清水 俊介 ミシシッピアカミミガメの生息地の水質 安藤

太田 真琴 秦野戸川公園及びその周辺における竹林 安藤  
の哺乳類相への影響

鈴木 一江 動物園におけるリスの展示方法と来園者 安藤  
の意識調査

大塚 知美 伊豆シャボテン公園とその周辺地域にお 土屋  
ける移入種ハリネズミ類 (*Erinaceinae*)  
の分布状況

武田 美貴 キツネザルのミトコンドリアDNAの全 土屋  
配列解読

岡野あすか 東葛飾郡におけるニホンシカ (*Cervus nippon*) 安藤  
の食性

中野紗綾子 マウス下顎骨形態の多様性解析 土屋

榎村 敦 御殿場市、裾野市および箱根町一円にお 土屋  
けるモグラ類二種の分布境界の確認

中山 真紀 野生動物の交通事故対策におけるフェン 安藤  
スの役割

勝俣 純江 水田におけるサギ類の採食行動の比較 小川

生川 理絵 神奈川県愛川町におけるマン (*Martes melampus*) 土屋  
の糞内容物の季節的变化

宮崎 美帆 神奈川県愛川町におけるテンとイタチの 土屋  
糞内容物比較

三好 一郎 アスマモグラ (*Mogera imaijumi*) の日周 土屋  
活動と飼育下との比較

安原 徹 厚木キャンパス周辺におけるモグラとア 安藤  
ナグマへの都市化の影響

山下 和美 水田におけるサギ類の採食地選択 小川

山本 洋祐 下顎骨の多変量解析による日本固有種ア 土屋  
カネズミの分類

慶徳早百合 東京都奥多摩地区におけるニホンモモン 安藤  
ガ (*Pteromys momonga*) の分布および生  
態

吉田 春奈 秦野戸川公園および周辺における小型哺乳 安藤  
類の環境利用状況

高橋 良咲 鳥類皮膚を用いた組織培養法に於ける材 土屋  
料の保存期間の検討

大橋 孝弘 人工卵殻を用いたウズラ胚培養法の検討 小川

## 東京農業大学の一員となつて

家畜衛生学研究室教授

井上 武

私の育つた地は藤沢で、厚木市とは同県内である。しかし、残念なことに東京農業大学に採用されて初めて本厚木駅を降りる次第で、全く不案内であった。東京農業大学といえば箱根駅伝の大根踊りで鳴らした大学であることは中学生頃から知っていたように記憶している。箱根駅伝は山口在住中も正月の恒例行事とし、3日はテレビで観戦をした。

さて、私の大学教員生活は東北大学農学部畜産学科(家畜衛生学教室)の助手としての約8年半を始めとして、山口大学農学部獣医学科(家畜衛生学教室)講師、助教、教授としての26年半を通じて、35年強に及んだ。この間、家畜衛生(特に予防衛生)面から、家畜の感染症を対象に研究を行ってきた。具体的には、サルモネラ菌の内毒素、ブタ、ウシのフロロラ、ブタの初乳と腸管内の免疫グロブリン、ブタのリンパ球、ブタのサイトカインの *in vitro*での産生とブタ、ウシのリコンビナントサイトカインの作製などである。また、平成15年4月より本学で大学の教員に復帰した。所属も、教官はやはり時代と同様農学部畜産学科家畜衛生学研究室である。本学で

私は大学卒業後企業に就職した。わずか3年半に過ぎないが、大学生活では得られない貴重な体験をした。例えば「コスト」意識である。学生諸君が技術者として世に出れば常に意識すべきことである。最近でこそ国、自治体でもコスト云々を聞くようになったが、以前は全く意識されていなかったといつてよい。小泉改革で特に話題になった道路公団の民営化での議論がそのよい例である。すべての経済活動は当然のこと、家計レベルでもコスト意識はかせない。最善の手段をとる必要がある場合でも次善の策に甘んぜざるを得ない場合がある。学生時代から十分意識して欲しい。

現在の就職難は学生、教員、事務員ともども頭の痛い問題である。かつて企業は新卒を採用し、社内教育により人材を育成し、後継者を育ててきた。しかし、バブル崩壊後、グローバル化のもとで、日本企業は社内教育を継続する余裕がなくなった。そのため、採用には即戦力を求めるようになり、新卒採用より中途採用が盛んになった。またリストラという名による人員整理で終身雇用制も崩壊した。このような状況下で学生の就職問題にどのように立ち向かうべきか学生、教員、事務とも考えなければならぬ。東京農業大学としては創立112年の歴史を有効に活用して、就職先を開拓する。学生に各地に活躍する卒業生に関する情報を提供し、コンタクトを取る機会を積極的に与える。さらに、大学独自のインターシップ制度を構築し、学生に職場経験を与える場を設けることなどによって、学生の就職意識を高める必要がある

は大学院担当のため、大部分の学部学生とは直接の触れ合いはなく、専ら当研究室の大学院生(博士後期課程3年1人、博士前期課程2年4人、1年1人)と日々接し、それぞれの学位論文研究の相談役を引き受けている。

山口大学に在職中非常勤講師として、鹿児島大学獣医学科、九州大学畜産学科、岡山大学畜産学科、山口県立女子大学(現山口県立大学)で講義を行ってきた。いずれの大学でも学生個々の気質はまちまちであるが、集団としては大差ないように思う。不思議なことに、入学年度による差の方が大きいと思う。しばしば他大学の先生方と今年の何年生は優秀であるとかあるいは不出来であるとかが話題になると、その先生方の評価も似たものであった。一大学での評価は全国的に共通するようである。

近年目立つのは、学生が汗を流して体を動かすことをいとうように思えることである。私は理系を専攻する人間は肉体労働者に徹すべきであると信じている。理系の学問の多くは自然の事象の調査結果あるいは実験から得られた成果に基づいて理論を構築するものである。頑強な身体がもつとも要求される。そして忍耐、継続が必要とされる。漢詩の一節に有名な「少年老易く、学成り難し」がある。現在は高学歴化で自立して活躍を始める年齢が遅くなっている。肉体的な能力の最盛期は短く、すぐに衰えが始まることになる。すなわち「老い易い」ことである。現在の若者全般に通じることであるが、学生諸君も心しておくべきである。さもなくば容易に「学成り難し」の結果となる。

う。学生は就職を文字通り「職に就く」ととらえ、己の専門性を深め、それに生涯をかける心構えが必要である。今の日本は社会の至る所でグローバル化の名のもとに国際化(アメリカ化?)が進んでいる。学生が将来、国際的に活躍するには語学の能力が必然的に要求される。就職にも語学力が有利に働く。特に英語の能力が要求される。中でも発信能力である。これは専門能力と相まって発揮される。具体的にはTOEICの点数で評価されるので、学生自身の評価を高めるためにTOEICを受験し、高得点を取ることを考えるべきである。併せて前述の「職に就く」を果たし、専門を究めてはじめて真の語学力も向上する。

最後に、学生諸君には社会に出て活躍するには何をなすべきかを考えて、大学生活を送ってもらいたいと願って、編集委員の依頼に対する責めを果たすとともに拙文を終えたい。



## あこがれ

家畜学研究室講師

西脇 充

昨今、誰でもゆったりした生活に憧れていると思う。考えてみると私自身の生活リズムは、今より以前はもっと「ゆったり」していたのではないかと思う。振り返って見ると、私が20代の頃は「生活のリズム」の中で、あまり「急ぐこと」もなくさらに「待つ」ことにあまり抵抗が無かった。今の生活リズムでは到底私自身の生活からは考えられない。これも時代の流れの変化である。この変化に疑問もなく進んできた。今で言うなら「なんだろう」と言うことである。簡単にこの変化を言うならば、これも時代の流れ・進歩で片づけられる。この20〜30年間の時代の変化は、この時代を生活した人々はきっと思うことであろう。この時代は、高度経済成長、技術革命などと凄まじかった。一方、畜産関係においても、この時代は大いに動物蛋白質を取ることが推奨され、卵及び肉さらに牛乳を多く摂取するようになった。これに伴い家畜飼育も多頭羽数飼育へ猛烈に進み、現在の飼育頭羽数・畜産物の消費量になった。

今の生活リズムを一言で言うと、多くの人は「バタバタ」・「セカセカ」ではないでしょうか。この生活から

「ゆったり」した生活へいち早く脱出したい人は、私だけではないでしょう。昨年、イライラするまでの待ち時間についてシチズン時計が報告していた。これによると、信号などの待ち時間：3秒、買い物時のレジでの待ち時間：2分、昼食で料理が出てくるまでの時間：10分、飲食などの待ち時間：30分〜1時間、駐車場・映画館などの待ち時間：15〜30分、恋人との待ち時間：20分などであった。学生諸君はこの待ち時間と比べてそれぞれの生活ではどうでしょうか。私はこの時間と比べて見ると、恋人との待ち時間は関係ないが、ほとんどがイライラ状態である。あこがれている「ゆったり」した生活にはほど遠い。私は待つことに関して、体のことより多くは時間帯をずらして行動することなどで対応して来た。体力から、現在は待つことのできる生活に対応が大切であるとひしひしと感じている。待つことにイライラしない「ゆったり」した生活を送りたいと思うのは私だけではないでしょう。そろそろ年齢から、今の生活リズムから「ゆったり」した生活リズムに気持ちをチェンジして行かなければならないと思う昨今である。

## 思い出の小岩井農場実習

家畜衛生学研究室教授

渡邊 忠男

現在、富士畜産農場で合宿実習として実施されている1年次開講の畜産実習（一）と2年次開講の畜産実習（二）は、本学の畜産学科に入学した学生全員が必修科目として必ず履修することが義務づけられています。実学主義を掲げている本学では、1年次の夏期合宿実習（畜産実習）はその最初の段階となります。

畜産学科入学生の一部の学生を除き、ほとんどのヒトが畜産業に対する理解や体験が全く無いことに等しく、「動物が好き」とか「動物と接触したい」などとの考えから畜産学科を選んだものと考えられます。小生も数十年前になりますが、同じような考えから、畜産学科に入学しました。代々の東京生まれの東京育ちで、田舎を持たないものにとって、広い大きな牧場での生活は大変魅力的で、是非やってみみたい仕事であり、大学4年の前期までは、卒業後2〜3年民間の中規模牧場で研修した後、北海道で牧場を開設するつもりで、土地の価格や資金繰り気候風土等を徹底的に調べ、おおよその実施可能な計画を作り挙げていました。残念ながら、家庭の事情により、東京に在住する必要が生じたので断念しま

した。

子供の頃から犬やチャボ、小鳥等の愛玩動物の飼育はいろいろとしてきましたが、産業動物としての牛や豚などについては入学時は全く白紙状態であり、触ったこともない状態でしたので、1年次の夏期休暇に入ってすぐ、厚木農場での畜産実習に入る前に農場実習を体験することが必要と考え、知人の紹介を受け、岩手県にある当時民間の大規模な企業型農場として有数の「小岩井農場」において3週間の牧場実習をすることにしました。

「小岩井農場」は、広い敷地内には、酪農部（乳牛部）の他に、養鶏部門、観光部門（ジンギスカン料理をしながらと記憶しています）および林業部門などがある企業型農場であり、現在も乳製品等は、ブランド製品として各都市で販売されています。

現在小岩井農場へ行くには、東京駅から東北新幹線で盛岡駅迄行き、田沢湖線（当時は雫石線だった）と思いますが？）に乗り換えて小岩井駅で下車すると、約5時間余で行けますが、当時は、東北新幹線もまだ開通して無かったもので、盛岡まで行く迄に確か半日以上かかり、乗り換え時間を考えると、小岩井農場に明るい時間帯に到着するためには前日出発の夜行列車に乗る必要が有りました。

さらに、現在とは違い「宅急便」や「貸し布団」なども無かったので前もって自分の寝具は鉄道便（チッキと云っていたと記憶していますが？）で送っておく必要があり、布団袋に寝具や着替えや非常食等を詰めて家の近

くの小田急線東北沢駅の荷物受付に運んで発送しました。しかし農場に着いた日には荷物が届かなくて翌日になったので、その日は、20畳位の広い部屋に一人で持参した衣類と座布団だけで寝ることになりました。7月でも東北地方の夜はかなり寒く夜中に何度か目を覚ました事を覚えていきます。

農場に到着したのが午後2時前後で、事務所であれど実習の説明を受けた後に、実習する場所の見学をした。最初に見学したのが、乳牛舎で、その規模は覚えていないのですが、搾乳量が日本一になった乳牛の乳房の大きさに驚いたことは今でも覚えていきます。入学時（多分今のオリエンテーション）に厚木農場で見た乳牛に比べて倍近い大きさ（？）だった事が記憶に残っています。次いで育成牛舎で生後間もない未だ臍の緒が認められる子牛を目にした時の感動が今でも残っています。さらに種牡牛舎に見学に行きその大きさと行動には恐怖さえ覚えました。当時の国内で有数の種牡牛が10頭以上繋留されており、全てが1トン以上の体重で、近づくと鼻息が荒く、目が充血していて、まえがきを始めて今にも襲いかかってくるような気がしたことを記憶しています。その後牧草地を見学しましたが、地平線まで続くその広さにもさらに驚愕しました。

翌日の実習初日は朝5時起きで、朝食前は乳牛舎で糞掻きが主体であった。初めての体験で従業員の人に教わりながら臭いとの格闘と、その速度の違いに只力んでしまつて疲れてしまつた事を覚えていきます。実習期間中ず

5時半に夕食をすませると後は自由時間となりますが、最初の1週間は夕食後1時間位で疲れが出て横になると直ぐに熟睡する状態で、全く余裕が無く、次の日に朝早く起きることだけを考える毎日でした。10日位してからやっと少し余裕が持てて、8時頃に宿舍の外へ出てみると電灯が全くないのに明るく感じたので夜空を見上げると真っ黒い布の上に宝石をちりばめたように夜空いっぱい星が明るく照らしている光景は、東京の夜空とは比べものにならないほどの素晴らしいもので、放牧場の牧草の中で寝ころんで夜空を眺めたことをいまでも思い出す事が有ります。その後現在まで各地で同じようなことを何回か試みましたが、小岩井農場での星空と同様に感激した夜景は、フィリップスのイロイロ島の海辺の砂浜で寝ころんで見た南十字星位でした。

初めての農場実習は、あつという間に3週間が過ぎ、ほとんど牧場作業での技術的なものは身に付かなかつたものの、産業動物（乳牛）を扱うことがいかに大変なこととであり、生きている動物を対象に利益を上げるためには1日も気を抜くことが出来ないと思感したことが、この小岩井農場での実習の収穫であった。その後2年次の夏期休暇中にも再び小岩井農場での実習（当時は、学外実習が必修として必要であったので）を同級生4人でやりましたが、前回の経験とその直後の厚木農場の合宿実習も体験した後だったので、実習したという印象が余り無く、わずかに放牧場で捕獲した2m近くの蛇（アオダイショウと思われる）を実習終了後に東京の自宅に持ち

つと朝食前の作業は同じで3週間目でやっと他の人についていける状態になりました。朝食は、ご飯とみそ汁とたくわんで、週に2回ほど魚の味噌煮缶詰が4分の1位出たことを覚えていきます。午前中の作業は9時から1時半でほとんどが乳牛舎か育成牛舎の掃除で、実習期間中（3週間）1度も搾乳牛に触れることは有りませんでした。おそらく未熟者が接触することにより泌乳量が低下することを危惧したものと考えられました。かろうじて、牛の体に触れたのは実習最後の2日間だけで育成子牛に人工乳の哺乳を体験しただけであった。

午後は、雨天時以外は1時半からで、トラクターやトラック等で牧草地に行き、夕方4時過ぎまで2m近い長さのフォークで機械で刈り取って放置してある乾草の台車への積み込み作業が連日行われました。刈り取ったままの乾草をフォークをうまく使つて台車に5m近く積み上げる作業と、刈り取つて乾燥した牧草を圧縮梱包したものをトラックに積み上げる作業のどちらかで、ともに腰に相当な負担がかかる作業であり、特に前夜に雨が降つた後では、乾草に水分が含まれてその重さが倍以上になり、最初の時は全く持ち上げられず、腰をうまく使うこつを覚えてもそれを積み上げるとは相当な重労働でした。現在は、牧草の梱包、積み込み、運搬等は機械で全てやっており、牧場にあるフォークも普通のスコップと同じ大きさの1m位のものがほとんどで、実習で使つた木の柄のついた長いフォークはほとんど目にしなくなり、何となく寂しい気がします。

帰つて飼育しようと、同室の友人達には内密で、押入内で宿舍の周辺で捕まえた蛙を餌に飼育していたが、捕獲してから3日後に同室で蛇が全く苦手な友人が、押入を開けてそれを見つけて悲鳴を上げて部屋の窓から飛び出して1晩中外で過ごしたので、残念ながら持ち帰るのは諦めて翌日、蛇をもとの捕獲した牧草地に放逐したことを今でも時々思い出すだけで、その他の事についてはほとんど思い出す事は有りません。

昨年暮れに「ふじみの」の原稿を頼まれましたが、余り題が浮かんでこなかったもので、ここ数年、富士畜産農場での畜産実習に参加することになったことにより、思い出すことが多くなった小生にとって貴重な初めての実習体験について書いてみました。

小岩井農場で体験した「地平線まで続く牧草地」と、「満天の星空」そして「北海道での牧場開設の夢」は数十年前の思い出として現在でも頭の中に残っています。これからずっと忘れることのない思い出として持ち続けるでしょう。

## エチオピアの畜産

富士畜産農場 講師

佐藤 光夫

二〇〇三年八月二四日～九月七日までの十五日間、国際協力機構 (JICA) の調査依頼により、エチオピアに行ってきた。エチオピアは遠い国であり、直行便が無いため成田からドイツのルフトハンザ航空でフランクフルト空港まで十二時間・二十三時間の待ち合わせの後、カイロ空港経由でアジス・アベバ国際空港まで六時間の道のりである。金曜日の午前十時三十分に出発して、到着したのは日曜日の午後八時過ぎであった。時差は六時間である。

エチオピアの正式国名は、エチオピア連邦民主共和国であり、国土面積は日本の三倍、人口は日本の約半分の六千万人位である。アフリカには五十四の国々がひしめいているが、唯一エチオピアだけが三千年の歴史の中で植民地の経験を持たない誇り高き民族といわれている。国土の標高が全体的に高く、首都アジス・アベバで二千五百メートルあり、平均気温が十六℃とかなり涼しい。気候は雨期と乾期がはっきりと分かれており、五月から十月までが雨期、それ以外は乾期でほとんど雨が降らない。年間の降水量が五百～六百mmと少なく、北海道の上

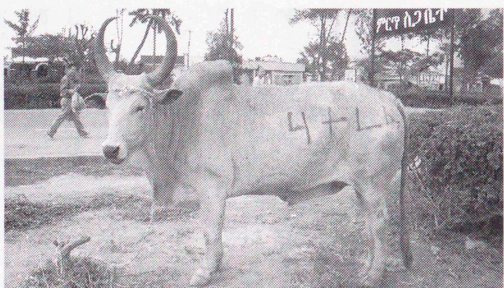
だけが栽培期間であり、六月に播種が集中している。主食はテフという粟のような小さな穀物で、これを焼いてインジェラという食べ物にして食している。ちなみに、エチオピアの通貨はブルであり、一ブルから百ブルまでの紙幣がある。一ブル以下がセントであり、百セントが一ブルとなる。一ブルは日本円で十五円になっている。牛乳三〇〇ccが七五セント、卵一個が十五セント、田舎町のホテル代が三十ブル (四五〇円) 程であった。

牛の頭数は国内に三千五百万頭飼育されていると聞き、驚いたが遊牧的に財産として飼っていることが多く、産業としてはあまり役に立っていない。今回の渡航目的は、「エチオピア農民支援体制強化計画事前評価調査」という難しいタイトルであるが、エチオピアでは食料不足・農家の所得不足が深刻であり、これらを改善するために具体的な支援内容を検討しようということである。アジス・アベバより南方に約百六十kmのところにあるアダミッソール農業試験場がある。かなりの田舎町であり、オロミア州の傘下に入る試験場である。牛だけを扱っている畜産試験場といえる。面積が三百ヘクタール、研究者二十数名、作業補助者が百名と多いが、予算不足で苦勞をしているようだ。

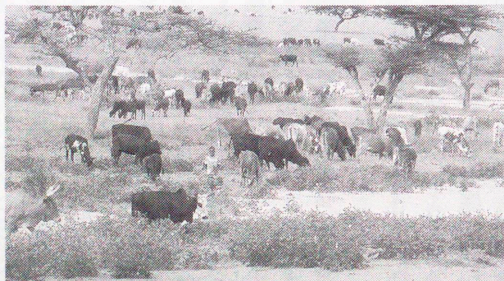
エチオピアの在来牛は、代表的なものとしてBorana種 (写真参照) とArusi種 (写真参照) である。試験場ではBorana種の雌牛を百六十頭飼育しており、純粋種を維持しようとしていることと、Borana種雌にJersey種を掛け合わせて、F1を作成している。このF1を普及させること

湧別地方と同じくらいと思われる。民族が八十余からなり、それぞれの言語を持つといわれるが、首都圏に集中するアムハラ族によるアムハラ語が共通語になっている。しかし、地方に行くと言えないことがあると言われている。そのことからエチオピアでは小学校から英語教育が始まり、中学校では英語による他科目の授業がされているという。十人中七人位は英語を話すので、国際交流は万全である。このことだけは日本より勝っていると思う。特記すべきことは、エチオピア独自の時間である。まず年号は、西暦二〇〇三年は一九九六年であり、雑誌や文献を見るときに気をつけなくてはならない。一年は十三ヶ月になっており、一月から十二月までは三十日で刻み、十三月は五日間である。正月前の五日間は、仕事は休みで国民は浮かれて過ごすという。ちなみに一月一日は西暦の九月十一日である。最後に時間だが、朝の六時が午前零時となる。一日の始まりは零時からということらしい。ホテルのフロントにある時計もエチオピア時間なので、非常にとまどってしまった。昼の十二時は六時であり、夕刻の六時はやっと十二時という具合である。エチオピア人は当たり前のように両者を使い分けている。すなわち両者を認識しているのである。

さて、本題の農業であるが、火山によって作られた大地は土壌が非常に悪い。乾期には地下水の上昇によって地上付近に塩類が集積し、堅くなる。雨期にはぬかるみの状態となる。土は平均七・八で極アルカリ土壌となっている。ほとんどの穀物や野菜を栽培しているが、雨期



↑エチオピアの代表的な在来種、Borana種



によって牛乳の利用、良質の牛肉利用が期待され、支援対象として考えている。また、周辺の農家を四つのグループにまとめ、総計八十農家を対象にこの牛を配布しつつあり、農家の畜産としての意識改革を目指している。これらのパイロットファーム的農家をFarmers' Research Group (FRG) として位置づけている。試験場としては牛を固定させ、増産させるためにセンターの建設や設備の充実を望んでいる。

農家視察で感じたことは、各農家ともに子供が多く大家族である。(写真参照) 中には奥さんが二人や三人居ることは珍しくない。



子だくさんの農家の主婦

電気の無い家が多く、トタン屋根の農家は裕福であり、ほとんどは藁葺きの家が多い。学校に行っている子供は英語を話す、親や学校に行っていない子供は英語を話せない。

農家の牛はアルシ種が多く平均的に牛が三十〜五十頭、ヤギ五十〜百頭、ロバ数頭を飼育しているという感じだが、ほとんど飼っているだけで金に困ると出荷する。去勢の習慣が無く、五〜六歳の牛肉が料理に出るので、凄まじく堅い。この辺の意識改革も支援の対象になろう。

## 当世研究室学生気質

野生動物学研究室助教

安藤 元 一

年をとると会話の中に必ず登場する言葉に「今頃の若い者は…」があります。一番古くは古代エジプトの遺跡にもそう書かれていたようですが、あまりにも有名なためか「古代エジプトのパピルスにもそう書かれ」、「石板にも刻まれ」、「洞窟に書かれ」などいろんなバージョンで引用されています。もとの文献に本当になんと書いてあったかは私知りませんが、それに類したことが書いてあったとすると人類は古代エジプト以来レベル低下を続けてきたわけです。学生同士の間でも上級生になると「今度の新入生は…」などと話していますから、この話題はこれからも決して廃れることはないでしょう。

しかし歴史を見ると、人類は賢くはなったとはいえないにせよ、前の世代より悪くなり続けてきたとも思えません。この言葉は世代間の価値観ギャップが広がったとき、かつての自分を棚に上げたとき、古い価値観で新しい価値観を見ると、とりわけ若者の価値観を理解できなくなってきたときに使われる安易な言葉なのでしょう。しかし、それならばえらく物わりのよいおじさんになって、若者の価値観をすべて認めればよいのでしょうか。

課題はこの他にも沢山あり、乾期における飼料の確保をどうするのか。生産された牛乳をどのように販売するのか。(電気がないので保存できない)ヨーグルトやチーズなどに加工して販売するための検討などである。是非とも畜産学科の学生には、積み重ねた勉学の応用の場として、エチオピアの畜産支援に参加してみるのも良いと思われる。

そうではないと思います。まず実利的に見て、大学生がこれから入ってゆく実社会は主に古い方の価値観で動いていますから、そういう場所でも不利にならないよう、どちらの価値観にも対応できる能力を身につけてもらうのが教員の仕事とと思っています。

今、私の机の上に「大学生の学習意欲と学力低下に関する研究会」からの実態調査アンケートが置いてあります。「私が学生の頃はもっと勉強したものだ…」は「今頃の若い者は…」の典型でしょうが、現在問題とされている学力低下はこうしたなげきのレベルを超えて深刻であり、とりわけ国際比較の中で学力低下は競争力の喪失に直結しますから放置しておくことはできません。たしかに昔と今では要求される学力は違っているでしょう。例えば、私が学生の頃は関数電卓が研究室に導入されはじめた頃でしたが、それまで手計算の統計処理で必須だった近似式を駆使できる能力はその時点で全く不要になってしまいました。ネットにつながれたパソコンのある環境では断片的な情報はたちどころに検索できますから、計算力だけでなく知識を記憶する重要性も低下しているのかもしれない。こうした能力を前提としている論理的な思考能力自体も必要なくなっているのでしょうか。

昨年二百万部を売り上げた養老孟司先生のベストセラー「バカの壁」は、実はこの世代間ギャップのことを上手に解説した本にほかなりません。この本には東大の事例などが出てきますが、さて農大ではどうでしょうか。世界の若者に共通の傾向、日本に限った現象、農大生に

特有のことなどがあるでしょうが、わが野生動物学研究室の学生を見ていて、良い面も含めて昔と異なる点をいくつか紹介します：

「授業を休むには勇気がいるが、単位にならない授業を聞こうとは思わない」： 授業出席率がよいのには感心しますが、その割にはさわがしいのが理解できません。私の頃は面白くない授業には出ないのがふつうでしたし、それで何とか卒業できたおらかな時代でもありました。また一昨年から新カリキュラムに移行していくつかの新科目ができました。旧カリキュラムの上級生からは新科目はおもしろそうという声も聞くのですが、実際に聞いてみようという学生はまずいないようです。

「レポートはなんとしても期限内に提出する」： 時間を守ることにについては明らかに今の学生の方が優れていると思います。文章についても、手書き文字を書く機会こそ減っていると思いますが、ワープロを含めれば文章を書く量はあきらかに増えていると思いますし、メールのやりとりで鍛えられているからでしょうか、生き生きとした文章が書ける点でも優れています。たしかに論理的文章は苦手なのですが、この点は少し指導するだけで明らかかな改善が見られます。レポートの内容については個人差が大きいのですが、聞いたことを徹底的にメモして厚みのあるレポートとして提出してくれる学生が多いように思います。ひとつ問題と感ずるのは、聞いたことをベースにして更に本やネットで情報を調べた形跡のあるレポートがまず見られないことです。そこまでの発展

性を期待するのは無理なのでしょうか。

「英語やプレゼンテーション能力は高くなっている」： 厚木キャンパスは留学生も少なく、英語の必要に迫られる場面も少ないために目立ちません。また英語のウェブサイトを開いているのも見たことがないので、海外に出かけたときの学生を見ていると、会話については物怖じしないだけでなく、実力もあるように思います。学生の関心は主として英会話にあるようですが、会社にはいけば読んで書く能力も必要になります。パワーポイントを用いたプレゼンテーションなどは今の学生の方が明らかにすぐれています。学生だけでなく世の中全体の能力が向上しているようです。昔は役人の講演などつまらないものの代名詞でしたが、最近は飽きさせないで行政施策を説明できる人が増えたように感じます。

「親に負担をかけたくないから勉強時間を削ってバイトする」： 農大生に限ったことではないのでしょうか、支払った学費に対して勉強でもとを取り返そうというセンスが足りないと思います。農大生が厚木で下宿生活すれば、授業料と生活費をあわせて年に50万円くらいの費用がかかるでしょう。おまけに不況の影響で学生の経済状況は悪化しており、学生の経済状況調査を見ると学生の生活指標は昨年1年間に5%以上も悪化しています。アルバイトで少しでもカバーしたい気持ちはよくわかりますが、アルバイトで50万円かせぐために勉強に使える時間が2割以上けずられるならば割に合わなくなります。また勉強だけは学生時代しかできません。卒業生が母校

を訪れて口をそろえていう言葉に「学生時代にもっと勉強しておけばよかった」があります。「今頃の若い者は…」と同様、この言葉も語り継がれてゆくのでしょう。また、勉強にお金をかけることもたいへん抵抗があるようで、本代などはまっさきに節約対象にあがるようです。一冊三千円の本を高いと思う人は多いようですが、授業料を単純に講義時間数で割り算すれば一コマの授業は五千円以上になりますから、三千円の本を半分でも読めば費用の十分にとれると思うのですが、本だけでなく、首都圏には学会、セミナー、各種施設など学校以外の勉強機会が数多くあります。これほど多くの機会がある都市は世界でも類を見ないでしょうし、厚木キャンパスは（世田谷キャンパスよりは不利ですが）少しの交通費でそうした機会を利用可能な位置にあるわけですから、そうしたメリットも大いに利用すべきだと思います。

「本を年間百冊読むのは宇宙人のすることである」： 本を読まなくなっているのは確かでしょう。二週間に1冊くらいは本を読んでほしいと研究室で話したら、そんな顔をされました。米国式の授業では2単位の講義で2週間に1冊くらいの課題図書が割り当てられますから、1科目につき1学期に7冊、1年に30単位の講義をとれば物理的には百冊以上は読めるはずですが、「勉強＝本を読む」という図式が成り立たなくなっているのかもしれないが、かわりにどのような勉強方法があるのか、それが見えないところが問題なのだと思います。

「身近な動物に興味があるが、遠くのことには関心が

ない」： インターネットや衛星放送などで世界の情報がいくらでも手にはいる時代の中で、学生の関心も当然世界に広がっていくと信じていたのですが、実際には関心が内向きになっているのは国際協力をこれまで主な仕事にしてきた私にとっては全く予想していなかったことでした。世界のどここのことでも画面でバーチャル体験できるようにになって、遠い場所のできごとにあこがれの要素がなくなり、「国際」といった言葉に魅力がなくなってしまうのでしょうか。野生動物学研究室の卒論テーマに関して学生は身近な外来種や鳥獣害のこと、あるいは学内で研究されているテーマなど、自分たちが肌で感じることでできる範囲に集中しがちです。この場合は幅広い勉強の不足が関心の範囲を狭めている大きな要因でしょう。

（番外）「午後になってもおはようございますと挨拶する」： この挨拶は私が学生時代にはまったく聞いたことがなく、農大に赴任してはじめてこの挨拶をされたときは芸能界に来たのかと思いました。おそらくコンビニなど交替制バイトなどの挨拶に由来するのかと思います。私には違和感があります。それではどう言えばよいのでしょうか。敬語の発達していない英語では hello でよいのですが、先生に「こんにちは」というのも他人行儀な気がします。おそらく日本では午後にはこのこ現れて大きな顔でできる挨拶用語は発達しなかったのでしょうか。会社訪問の折り、午後の面接でつい「おはようございます」と言わないよう気をつけてください。在学中はアル

バイトばかりしてましたと自分で言っているようなものですか。  
さてあなたの場合はどうでしょうか？

## 集う学友

### 笑顔でいられること

畜産学科 4年

本間 彩子

人は楽しいことや、嬉しいことがあった時笑顔になる。笑顔という表情は人に与えられた数ある表情の中で最も素敵な表情だ。笑顔で話しかけられて嫌な気分になる人はいないと思う。ましてや、大切な友人や家族、恋人に笑顔で「頑張って」と応援されて、頑張らない人はいないと思う。

私は大学でチアリーディングというスポーツに出逢ってから笑顔でいられることがとても素晴らしいことなのだと思うようになった。チアリーダーの役目は、応援すること、元氣付けること、勇気を与えることだ。時にチアリーダーは演技を披露する選手として舞台上に立ち、他の人々から大きな声援で応援される。その時、応援されることにより普段よりも何倍ものパワーがでて、いつもの練習よりも何倍ものいい演技ができることがよくある。応援されて初めて、応援することによって不思議なパワーを引き出しているということに気付いたのであった。

チアリーダーは何もチアリーディングというスポーツをやっている人だけがチアリーダーではないと思う。チ

アリーダーは応援する人、元氣付ける人、勇気を与える人なのだから他人を応援した時、その人はチアリーダーになっている。

私が大学3年になってから、研究室とチアリーダー部の両立は体力的にも精神的にも厳しいものであった。研究室で豚の当番をしてから電車に乗り世田谷キャンパスへ向かい、部活をするという生活が2年続いた。当番の時は5時起床で部活が終わって家に着く頃には10時近くになっており、倒れるように寝て、また次の日当番という日もあった。何で私はこんなにつらいんだとヤケを起こしたくなる気分になった日も多々あった。

そんな時、私のまわりには実に多くのチアリーダーがいた。研究室に行けば、研究室の仲間が、頑張れと私を応援してくれた。その時私の体の中から不思議なパワーがでてきて卒論実験を頑張ることができた。家に帰れば、両親や妹が私のチアリーダーとなって、元氣を与えてくれた。そして、部活の仲間は私のかけがえのないチアリーダーとなり、収穫祭や大会の演技のための辛い練習を乗り越えられる勇気を与えてくれた。その時のみんなの顔を思い出せば、どの顔も素敵な笑顔であった。今まで本当に多くのチアリーダー達に私は支えてもらった。

チアリーディングというスポーツに出逢って、笑顔で応援してくれる人々の素晴らしさを解ったことはとても大きな収穫であった。そして、私自身も、勇気を与えてもらった、元氣をもらったと思ってもらえるような人になりたい。いつも笑顔でいられる人になりたい。

## 農大生活3年間を振り返って

畜産学科 3年

石毛 太一郎

思い起こせば3年前の入学式わけも分からず1番前に座らされたところから私の農大生活が始まりました。この時の事は覚えていませんが、勉学に励むという目標がありました。これが大学生活の目標になりました。1年の間は誰にも負けたくないという気持ちで勉学に努めた気がしました。英語は今後必要ということで世田谷キャンパスの英語部に入部。ここで、他学部の人や他大学の人と知り合い、幅広い交友関係とさまざまな知識を得ることが出来た。心残りといえば、もう少し見識を深め、英語の勉強をしたかった。

2年の目標は厚木キャンパスに英会話サークルを作りたい。厚木でも英会話が出来ればいいなと思い結成を決めました。人数集め、英語が出来る講師の確保などなど様々な問題がありました。何とか結成は出来たものの活動は悲惨なものでしたが、様々な人に助けってもらい何とかやってこられました。今年は英語専任の講師が顧問になり活動もしっかり出来るようになり一安心！2年を総括すれば、人の優しさ、物事を始めることや上に立

つことの難しさを知り、苦悩、自分自身の力のなさを痛感した1年でした。

そして、今年。家畜生理学研究室への配属。実験がしなくて理系を選んだ私にとって充実の1年でした。実験の失敗、実験成功時の達成感、英語の論文講読、家畜の世話など何をとっても初めての体験でした。時には喜び、時にはひどく落ち込みこのまま研究者を目指していいのかわかったこともありましたが、でも、そんな時に農大に入ってから友人の励ましや、農大生活において得た自信、根気強く諦めずに何事も取り組むことを糧に失敗を恐れずに実験や様々な事に取り組むことができています。今後、農大生活によって得られた人生の財産を生かし、農大魂を忘れずにこれからの人生に邁進していきたいと思えます！

## Thaiレポート

畜産学科 2年

山本 茜

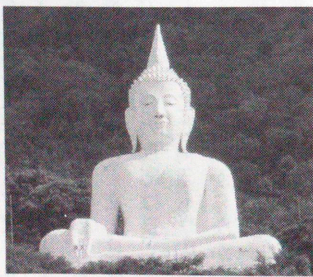
新しい年になってタイの友達から写真つきの手紙が届き、みんなと共に過ごしたタイでの夏が鮮明によみがえってきました。「微笑みの国」と言われるタイでの一ヶ月、私は素晴らしい体験をたくさんして、素敵な仲間ができました。特に一緒に留学したメンバーは兄弟のようにかげがえのない存在です。そして秋にはタイの学生が交換留学で日本にやって来て充実した時間を過ごしました。この仲間達と様々な出来事を通して自分の視野が広がりました。

講義・実習はすべて英語で、強い日差しの中、仲間と協力しながら必死で理解しようと積極的に取り組む事ができました。先生方も話し好きで親しみやすく、質問を繰り返す私たちに親切、丁寧に接してくれました。

このプログラムの一番の魅力は、タイの学生とペアになって行動するというバディ制度があることです。バディ達はとても優しく陽気で、そして何より笑顔が素敵です。いつも私たちのことを気づかせてくれ、日本とは異なるタイの文化・言葉・食べ物・生活などいろいろ

ことを教えてくれました。初めは英語でのコミュニケーションは難しく、どう気持ちを伝えればいいのか分からなくて戸惑いました。今では冗談を言い合え、一緒にいるだけで楽しくなる最高の友達です。また、どこに行っても出会うタイの人々は初対面の私たちに温かい笑顔を見せました。みんなパーティーが大好きで、飲んで・歌って・踊っていつもとても楽しかったです。現地の人と触れ合うことができるのはこのプログラムならではのことでと思います。

タイ料理はどれも美味しく、新鮮なフルーツも盛りたくさん、毎回おなかいっぱい食べました。見たことのないもぎたての果物が山積みになっている市場は魅力がいっぱいでウキウキしました。バイクの二・三人乗り、滝でのダイブ、雨水での生活：タイを満喫して多くの刺激を受けました。タイで過ごした時ように積極的に多くのことに挑戦していきたいです。



## 進め！ボランティア部

畜産学科 1年

関 綾 乃

まだ肌寒い桜の季節に、ここ厚木に越して来て一年が経とうとしています。まだまだ田舎者の私も、すっかり一人暮らしにも慣れ、笑いの絶えない毎日を過ごしています。11月には畜産学科統一本部の一員として収穫祭などにも参加し、とても貴重な経験をすることができました。一緒に準備に明け暮れた沢山の尊敬できる先輩方・ゆかいな仲間達は、私が楽しい大学生生活を過ごすためには欠かせない存在となっています。また、ボランティア部にも入部するなど、充実した大学生活を送っています。

ボランティア部で初めての顔合わせの日、これから一緒に活動していく先輩方、友達に大きな期待を抱いて部屋に行きました。しかし、そこには先輩が2人、1年は私を含め4人いるだけでした。全部で6人です。今まで先輩方は2人でどんな活動をしてきたのだろうか？これからこの人数で活動していくのだろうか？と部屋に踏み込んだものの不安で、いきなり退部も考えました。この部員の少なさの原因は、大学内でのアピール不足だと思っています。主な活動内容は、ごみ拾い・草刈・花植えで、

やして、活発な部活にしていこうと考えています。これからの活動では大学内に留まらず、多くの人に東京農業大学ボランティア部の活動を知っていただく為に外へ飛び出し、市役所・介助犬育成センター・農家・幼稚園・福祉施設などにも足を運び、地域の方との交流も大切にしています。

ボランティアは一人ではできないと思います。ボランティアする人は、それに協力してくれている人にボランティアをしてもらっているのですから。

大学内で活動はないのです。そこで、大学内でアピールする方法として、アフガニスタンの子ども達に『ピースバック』という文房具セットを送るプロジェクトがある事を持ち出しました。学内で募金活動を行い、文房具を買う資金を集めるという計画でした。皆の反応は良くすぐに行動に移すことができましたが、ここ何年も学内で募金活動の例がないという事もあり、事務室からなかなか許可がおりませんでした。活動はピースバックとは何か？というポスター作りから始め、昼休みにけやき前で募金を行いました。活動前のミーティングでは、知名度からみても一、〇〇〇円集まれば良い方だ！と話していたのですが、実際に集まったのは一二、三〇〇円でした。予想をはるかに上回る募金の額に心温まりました。これは、沢山の方々の協力があったからこそ成しえたことです。ご飯も食わずに、一緒に募金箱を持って活動に参加してくれた友達。学生だけでなく、先生方、警備室の方、教習所の方、散歩の途中けやきで昼食をとっているおじちゃん・おばちゃん：本当に多くの方々にご寄付をいただきました。お陰様でピースバックを7個も作る事が出来ました。これらは、アフガニスタンに送られ、日本人の手によって、直接子ども達の手にも渡されます。

ボランティア部内で役員交代が行われ、二年生がいないうちにもあり、幹事・副幹事・会計と全てを、自分達一年に任されることになっています。ボランティア部を盛り上げていこうと意気込んでいる私達は、部員が少ない分もっとボランティア部の活動をアピールし、仲間を増



## 平成14年度収支決算報告

平成14年6月1日～平成15年5月31日

### 一般会計の部

#### 収入の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)	備 考	
会 費	新 入 生	2,000,000	1,770,000	230,000	10,000×177
	編 入 生	122,500	142,500	△20,000	※2)
	過年度分	3,160,000	2,200,000	960,000	10,000×220
雑 収 入	0	0	0		
当期収入合計(A)	5,282,500	4,112,500	1,170,000		
前期繰越収支差額	548,792	548,792	0		
収 入 合 計 (B)	5,831,292	4,661,292	1,170,000		

#### 支出の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)	備 考
収 穫 祭 援 助 費	700,000	700,000	0	特別会計に繰り出し
ふじみの印刷費	430,000	414,700	15,300	1400部発行
卒 業 祝 賀 会 費	200,000	200,000	0	
卒 業 記 念 品 費	450,000	350,175	99,825	290個製作
新 入 生 歓 迎 会 費	200,000	182,092	17,908	
消 耗 品 費	50,000	12,586	37,414	
通 信 運 搬 費	150,000	108,998	41,002	
雑 費	70,000	8,731	61,269	
未 払 い	507,500	507,500	0	※1)
予 備 費	230,000	0	230,000	
当期支出合計(C)	2,987,500	2,484,782	502,718	
当期収支差額(A)-(C)	2,295,000	1,627,718	667,282	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,843,792	2,176,510	667,282	

※1) 平成13年度の支払いが遅れたため卒業記念品費(367,500円)未払い  
新入生歓迎会料理代(140,000円)未払い

※2) 7,500×1人 5,000×27人

上記のとおり報告する。  
平成15年7月3日

畜友会会長 古川 徳 印

## 平成15年度畜友会事業報告

平成15年6月1日～平成16年5月31日

畜友会だより

### 平成15年

- 6月2日～11日 厚木キャンパススポーツ大会参加
- 7月11日 平成15年度畜友会定期総会(於 トリニティホール)
- 8月4日 1年生対象収穫祭説明会(於 富士畜産農場)
- 10月15日 第4回厚木キャンパス収穫祭 及び  
第112回体育祭畜産学科統一本部本部開き  
(於 食堂・けやき)
- 10月31日 第4回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加
- 11月1日～2日 第4回厚木キャンパス収穫祭参加  
(家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊)
- 11月4日 第112回体育祭参加(於 世田谷キャンパス)
- 11月18日 第4回厚木キャンパス収穫祭 及び  
第112回体育祭畜産学科統一本部慰労会  
(於 食堂・けやき)
- 平成16年
- 3月20日 畜友会誌「ふじみの」40号発行
- 3月21日 卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
- 4月上旬 新入生学外オリエンテーション参加(於 富士畜産農場)
- 4月下旬 新入生歓迎会(於 食堂・けやき)

## 平成15年度畜友会予算

平成15年6月1日～平成16年5月31日

一般会計予算(案)

収入の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)	備 考	
会 費	新 入 生	2,000,000	2,000,000	0	
	編 入 生	37,500	122,500	△85,000	※1)
	未 収 分	1,300,000	3,160,000	△1,860,000	※2)
雑 収 入	0	0	0		
当期収入合計(A)	3,337,500	5,282,500	△1,945,000		
前期繰越収支差額	2,176,510	548,792	1,627,920		
収 入 合 計 (B)	5,514,010	5,831,292	△317,080		

※1) 編入生 2年生……7500円×1人  
3年生……5000円×3人  
4年生……5000円×3人

※2) 1年生……10000円×48人  
2年生……10000円×50人  
3年生……10000円×17人  
4年生……10000円×15人 計130人

支出の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)	備 考
収 獲 祭 援 助 費	1,030,000	700,000	330,000	※3)
ふじみの印刷費	430,000	430,000	0	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	400,000	450,000	△50,000	
新入生歓迎会費	150,000	200,000	△50,000	
消 耗 品 費	50,000	50,000	0	
通 信 運 搬 費	150,000	150,000	0	
雑 費	70,000	70,000	0	
未 払 金	0	507,500	△507,500	※4)
予 備 費	230,000	230,000	0	
当期支出合計(C)	2,710,000	2,987,500	△277,500	
当期収支差額(A)-(C)	627,500	2,295,000	△2,222,500	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,804,010	2,843,792	△594,580	

※3)活動時に使用する法被代33,000×10着分の金額です。

※4)一昨年度の卒業記念品代金367,500及び  
新入生歓迎会料理代金140,000が未払いのため

## 特別会計収支決算報告

平成14年6月1日～平成15年5月31日

第3回厚木キャンパス収獲祭

収入の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)
一 般 会 計 よ り	700,000	700,000	0
雑 収 入	0	0	0
当期収入合計(A)	700,000	700,000	0
前期繰越収支差額	280,767	280,767	0
収 入 合 計 (B)	980,767	980,767	0

支出の部

科 目	予算額 (円)	決算額 (円)	差 額 (円)
統 一 本 部	400,000	352,278	47,722
特 別 企 画	70,000	30,969	39,031
体 育 祭	70,000	54,644	15,356
宣 伝 隊	150,000	149,933	67
装 飾	50,000	0	50,000
家 畜 苑	150,000	55,170	94,830
予 備 費	45,000	0	45,000
当期支出合計(C)	935,000	642,994	292,006
当期収支(A)-(C)	△235,000	57,006	△292,006
次期繰越収支差額(B)-(C)	45,767	337,773	△292,006

上記に相違ないことを認める。  
平成15年7月2日

平成14年畜友会監査委員

松岡昭善 近江弘明  
高木香苗 飯塚さやか

## 監査報告書

畜友会会則第9章、第29条及び30条の規定に基づいて平成15年7月2日に平成14年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告書、会計諸帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

## 平成15年度畜友会役員

平成15年6月1日～平成16年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	古川 徳	畜産物利用学研究室
副会長	栗原 良雄	家畜飼養学研究室
副会長	渡邊 忠男	家畜衛生学研究室

委員長	3年 後藤 隼人	家畜繁殖学研究室
副委員長	3年 山本 健二	家畜育種学研究室
	2年 岡部 健典	
書記	3年 磯田 明里	家畜衛生学研究室
	2年 吉田 佑美	
会計	3年 飯田 真希	家畜繁殖学研究室
	2年 小山 智美	
渉外	3年 藤本 泰朗	家畜育種学研究室
	2年 川口 桂介	
企画	3年 山川 将弘	家畜学研究室
	2年 五島 惟道	
庶務	3年 菅原 佳宏	家畜衛生学研究室
	2年 大原 賢二	
編集	3年 石井 淳子	家畜繁殖学研究室
	2年 横山 祥子	
監事	松岡 昭善	畜産物利用学研究室
	門司 恭典	家畜繁殖学研究室
	3年 飯塚 さやか	家畜繁殖学研究室
	2年 三浦 隆雄	

## 特別会計予算

平成15年6月1日～平成16年5月31日

### 第4回厚木キャンパス収穫祭

#### 収入の部

科目	畜友会援助費			農友会厚木支部助成金			合計		
	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)
一般会計より	1,030,000	700,000	※3) 330,000				1,030,000	700,000	※3) 330,000
雑収入	0	0	0				0	0	0
畜産学科統一本部				200,000	200,000	0	200,000	200,000	0
家畜苑				800,000	800,000	0	800,000	800,000	0
装飾				※1) 未定	200,000	△200,000	※1) 未定	200,000	△200,000
当期収入合計(A)	1,030,000	700,000	※3) 300,000	1,000,000	1,100,000	△200,000	2,030,000	1,900,000	△130,000
前期繰越収支差額	337,773	280,767	57,006				337,773	280,767	57,006
収入合計(B)	1,367,773	980,767	387,006				2,367,773	2,180,767	187,006

農友会厚木支部の助成金は、上記の部門ごとに割り当てられます。

※1) 装飾は学内装飾として割り当てられるため、本年度、畜産学科統一本部に配当される金額は未定です。

#### 支出の部

科目	畜友会援助費			農友会厚木支部助成金			合計		
	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)
統一本部	730,000	400,000	※3) 330,000	50,000	50,000	0	780,000	450,000	※3) 330,000
特別企画	50,000	70,000	△20,000	50,000	50,000	0	100,000	120,000	△20,000
体育祭	100,000	70,000	30,000	50,000	50,000	0	150,000	120,000	30,000
宣伝隊	150,000	150,000	0	50,000	50,000	0	200,000	200,000	0
装飾	50,000	50,000	0	※1) 未定	200,000		50,000	250,000	△200,000
家畜苑	150,000	150,000	0	800,000	800,000	0	950,000	950,000	0
予備費	45,000	45,000	0	0	0	0	45,000	45,000	0
当期支出合計(C)	1,275,000	935,000	340,000	1,000,000	1,200,000	△200,000	2,275,000	2,135,000	140,000
当期収支(A)-(C)	△245,000	△235,000	△10,000				△245,000	△235,000	△10,000
次期繰越収支差額(B)-(C)	92,773	45,767	47,006				92,773	45,767	47,006

農友会厚木支部の助成金は、残金は返却するため、次期繰越はありません。

※3) 活動時に使用する法被代 33,000×10着分の金額になります。

## 第四回厚木キャンパス収穫祭 第一二回体育祭 事業報告及び結果報告

### 【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第4回収穫祭での活動内容は、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、槽装飾、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動は、先生方と連絡をとり、それぞれの各部門及び、第4回厚木キャンパス収穫祭実行本部、農学科統一本部、そして世田谷キャンパス13学科統一本部と連絡を取り、また畜産学科統一本部をまとめ、4回目となる厚木キャンパス収穫祭、第112回体育祭を成功させようと最後まで努力しました。

本年度も晴天に恵まれ、昨年を越える来場者を数え、皆様のご協力のもと無事成功させることができました。

来年度は、第5回という節目の回数ではありますが、更なる飛躍を目標に皆と一致団結して活動していきたいと思えます。



### 特別企画

今年の特別企画は、恒例の地域密着型のテーマの基、だいぶ厚木色へと染まってきたステージを企画・運営し、より多くの学生や地域の方々に参加していただきました。

毎年大盛り上がりでの『ミスコン』『女装コンテスト』を始め、子供に大人気だった『バルーン教室』や、思わず「へえ〜」とうなずいてしまう『プチ講座（農）』、大人から子供まで楽しんでアイスクリーム作りをした『プチ講座（畜）』では予想以上の参加人数を集めました。

また、毎年恒例となった『陽気な畑の歌謡祭』では多くの人が美声を競い、農大の知識が問われる『クイズアグリアワ〜』では学生以外にも多くの人に参加していただきました。さらに定番の模擬店等のコマ〜シャル企画『ステ☆コマ』や家族で豪華商品を狙う『幸せ家族計画』に加え、今年新たにスピードの速さを競い合う『SPEED KING』や、まるでテレビ企画さながらの恋愛企画で多くのカップルをつくった『私を農家につれてっ〜』『赤い糸伝説』といった企画も生まれました。

そして、毎年根強い人気とともに大盛り上がりを見せる『リーダー公開』や、本場オホーツクキャンパスの生徒による『YOSAKOIソラン』は天候に恵まれたこともあり、通年以上の成果で大勢の人に見てもらったことができました。



### 宣伝隊

東京農業大学に厚木キャンパスがあり、その厚木キャンパスでも収穫祭が行われていることを多くの方にも知ってもらうために今年も宣伝活動を行ってきました。

宣伝活動は、8月のDANBEパレードでは団扇の配布や農大名物の青山ほとりに行いました。9月下旬から収穫祭までの土日には本厚木駅や海老名駅等の各駅、厚木市内の公園等で、ピラ・野菜・野菜の種・風船・しおりを配布し全学応援団によるリーダー公開を行いました。10月に経堂の農大通りで行われた経堂パレードには9月下旬から作り始めた畜産学科伝統の御輿を担いで参加し、第3位という成績をおさめました。

また、農大生に収穫祭の呼びかけをするためにけやき前において円陣青山ほとりに行いました。収穫祭当日はちびっ子お絵かきコンテスト、野菜の無料配布を行う等の活動の結果今年も昨年以上のご来場の方々を迎えることができました。



### 体育祭

皆さん、体育祭には来たことがありますか？

体育祭では、玉入れ、綱引きなど15学科対抗の競技がたくさんあります。畜産学科では毎年たくさんのお客様が体育祭会場の世田谷キャンパスまで駆けつけてくれます、駆けつけてくれた学生はみんな競技に出て楽しんでいきます。15学科対抗なのでどの学科も大変勝負にこだわります、しかし、畜産学科は

『わざわざ世田谷まで来たんだから負けるわけにはいかない』という気迫で世田谷キャンパスの13学科に引くどころかどん押しして、毎年上位に食い込んでいます。

体育祭ではそういった競技に参加するほかにももう一つ見て楽しめる競技があります。

それは応援合戦といって、私たち畜産学科統一本部が考え練習した「舞」です。この競技も15学科対抗ではありますが、他学科に応援され、また他学科を応援し、とても見ごたえがあり胸が熱くなります。体育祭に来たことのない人は是非ぜひ参加、または見に来てください。



## 槽装飾

「槽」とは、体育祭開催中に使われるいわゆる「応援席」のようなものです。大きさは高さ約5m50×幅約9m×奥行き約3mで、各学科ごとに土台から造ります。金属の管を組み立て、応援席となる場所の後ろに華となる絵を描きます。

槽の絵は各学科の特色が出るもので、今年は畜産学科らしいものを出し、「豚」を描きました。ただ平面的な絵を描くだけでなく、豚の特徴である鼻を立体的にすることで、かわいい中にもリアルさを出し、さらにインパクトとして手製ミラーボールを取り付けました。

この装飾は好評でたくさんのお票をいただき、槽装飾の部で4位という成績を取ることができました。



## 研究棟アート

研究棟アートとは、駅から見えるほどの大きな絵を大学内で一番高い建物である研究棟の壁一面に装飾するという部門です。

9月の終わりごろから作業を開始し、昨年は生地に布を使っていましたが、布は雨や風に弱いため、今年は、初めて雨にも風にも強い15m×15mの大きなブルーシートを2枚使ってペンキで絵を描きました。

絵は、農学科・畜産学科と分けて、農学科は農学らしきを出すためにイネや大根やイモなどを描き、畜産学科は畜産らしい牛や豚やヒヨコを描き、それぞれの学科に合ったものを大きくはつきりわかるように描きました。

また、研究棟の一番上にも『第4回収穫祭』の文字を30mの布に書きました。



## 家畜苑

今年の家畜苑はホルスタイン、黒毛和種、水牛、リママ、豚(2種)、ダチョウ、家禽(7種)、ちびっこ動物園として山羊、羊、ヒヨコを展示しました。

今年は前年と違い、場所がバス停前から講義棟一階出入口前広場に移動しました。場所が広くなったことにより水の小屋を広くし、お客さんに乗っていただくようなこともできました。ダチョウの卵に興味をもたれた方々や、またちびっこ動物園ではヒヨコの羽化を見ていただいたり、直接触れていただいたりなど普段体験することができないこともあって周りからお客さんがいなくなることはありませんでした。

アンケートに答えていただいた方に風船をプレゼントするなどというも行い、場所の移動にもかかわらず、多くの方々に家畜苑を知っていただけたと思います。



## 【結果報告】

### 宣伝隊

農大通り賞……………第3位

### 体育祭

総合順位……………第3位  
 競技の部……………第3位  
 棒引き(女子のみ)……………第2位  
 各学科対抗リレー  
 (女子の部)……………第1位  
 玉入れ……………第3位  
 槽装飾の部……………第4位  
 応援の部……………第3位

# 東京農業大学農学部畜産学科 “畜友会”会則

## 第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。
- 第二条 本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

## 第二章 業務

- 第四条 本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。
- (1) 会員相互の親睦
- (2) 講習会、研修会及び研究会発表の開催
- (3) 機関紙「ふじみの」の発行
- (4) 大学行事（収穫祭等）への参加
- (5) その他第三条に付帯する業務

## 第三章 会員及び役員

- 第五条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正会員 畜産学科の学生
- (2) 特別会員 畜産学科教職員ならびに大学院生

## 第六条

(3) 名誉会員 役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

本会は次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 執行委員

委員長 1名

副委員長 2名

書記 2名

会計 2名

渉外 2名

企画 2名

庶務 2名

編集 2名

監事 4名

## 第七条

(1) 会長は会を代表し、会務を総理する。

副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。

また1名は総務を他の1名は会計を分担する。

(2) 委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。

副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

## 第四章 総会

## 第十条

(1) 総会は定期総会とする。

(2) 総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3) 定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4) 臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができ。

## 第十一条

総会開催は七日以前に公示しなければならない。

## 第十二条

(1) 総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。

(2) 委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。

(3) 委任状の検査は執行委員が行う。

## 第十三条

定期総会は次の事項を決議する。

① 前年度の事業報告および収支決算報告

② 次年度の役員

③ 次年度の事業計画および収支予算

④ 会則の改正

⑤ その他

## 第八条

(1) 本会には連絡委員を置く。

(2) 連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会での意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

## 第九条

役員および連絡委員の選出および任期

(1) 会長は畜産学科長がこの任にあたる。

副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2) 執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。

尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3) 執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4) 連絡委員は、各学科（1、2年次）および各研究室（3、4年次）で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第十四条 総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条 議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条 総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条 総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

#### 第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条 (1) 第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2) 会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条 執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条 執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条 執行委員会で議決された事項について、委員

(2) 会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならぬ。

#### 第七章 機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条 (1) 第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2) 編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3) 編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4) 編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

#### 第八章 大学行事への参加

第二十八条 (1) 第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2) 設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。

尚、内規は別に定める。

(3) 委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第二十二條 長は会長および副会長に文章で必ず報告する。連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1) 連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2) 連絡委員会は次の事項を処理する。

① 執行委員会で決定した事項の伝達。

② 一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3) 連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三條 本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

#### 第六章 会計

第二十四條 本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてて。

但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五條 (1) 会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

#### 第九章 監査

第二十九條 監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十條 監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

#### 第十章 付則

第三十一條 本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二條 本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを試行する。

# 畜友会収獲祭内規

## 第一章 目的

第一条 本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条 収獲祭は東京農業大学農友会厚木支部収獲祭規定第1条および第9条に基づく収獲祭に参加する。

## 第二章 組織および役員

### 第三条 組織および役員

収獲祭を円滑に運営するため畜産学科収獲祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

- 1、統一本部
- 2、宣伝隊実行本部
- 3、特別企画実行本部
- 4、学内装飾実行本部
- 5、家畜苑実行本部
- 6、体育祭実行本部

### 第四条 実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長	1名
副会長	2名
統一本部顧問	若干名

### 第五条

- |           |     |
|-----------|-----|
| 統一本部委員長   | 1名  |
| 統一本部副委員長  | 1名  |
| 統一本部会計    | 1名  |
| 各実行本部顧問   | 若干名 |
| 各実行本部責任者  | 各1名 |
| 各実行本部副責任者 | 各1名 |
| 各実行本部会計   | 各1名 |
- (1) 会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。
- (2) 統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。
- (3) 統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。
- (4) 統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

### 第六条

- (1) 会長は会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときはこれを代理する。
- (2) 統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(3) 統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者として各本部の円滑な運営活動を助ける。

(4) 各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者と協力して円滑な運営・実施にあたる。

### 第七条 実行委員会

実行委員会として6本部会議および各実行本部会議を置く。

- (1) 6本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収獲祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。
- (2) 各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

## 第四章 付則

### 第十二条

本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

### 第十三条

本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

## 第三章 会計

第八条 収獲祭の会計は特別会計として畜友会収獲祭



## 明るく・楽しく・元氣よく

統一本部委員長

3年 後藤 隼人

統一とは、農大の学祭、つまり収穫祭を盛り上げる一つの団体であると同時に各学科の特色を出し、収穫祭の成功を左右する大きな団体の一つである。

自分が統一に入ったのは、一年のときに言われた当時の先輩と友達の誘いがきっかけだった。入学して夏休みも終わり、後期が始まってしばらく経った時である。統一の先輩に「一緒に体育祭やろうぜ。」と誘われた。また、先に統一に入っていた友達にも「手伝ってよ。」などと声をかけられようか迷っていた。何故だかはわからないが次第にその統一に自分は吸い寄せられていき、しばらくの間考えてから「自分が少しでも協力できるなら。」と思い、ある日、授業が終わってからその統一に参加した。これが、自分が統一にはいったきっかけだった。

それからの毎日は、終夜作業や炊き出しなどを通して、今まで全く知らなかった人達に出会うことができ毎日楽しかった。応援合戦の練習などで、辛い日もあったが笑いが絶える日は無かった。いつでも笑いや楽しさのあるこの統一の雰囲気が入った。自分は統一に入ったのが一番

遅かった為に、体育祭の応援合戦の練習では一日も早く覚えようと、友達と二人でどうしても踊れない部分を早朝まで練習した事を今でもよく覚えている。それでも毎日が本当に楽しかった。そして、いよいよ入学して初めての収穫祭を迎え走り回っているうちに体育祭の日を迎えた。応援合戦前なんともいえない緊張感に押し潰されそうになった。本番を終え、またなんともいえない達成感に自分はずつまれた。あの時の感動があったからこそ、今日まで統一にいたのかも知れない。そして、一年の収穫祭は終わった。この時、まさか自分が3年になって委員長をするとは思ってもしなかった。

収穫祭も終わりほっとしている時に、次の委員長の市川先輩から、副統(副統一委員長)をやってみないかと誘われた。本当に自分がその役割を果たすことができるのかという大きな不安や心配が一気に肩にのしかかった。そして本当に自分でいいのか?自分委員長になった時みんなはついてきてくれるのかと疑った。まさかこんなことになるとは自分でも思っていなかったが考えた末に、「自分が頑張ればきっとみんなもついてきてくれるはず。」と心に決め、副統をやることにした。

それからというもの、副統になってからのプレッシャーは常にどこかにあった。けれども、自分ができる全てのこととはやって市川先輩をサポートしていこうと決め、二年の収穫祭・体育祭を迎えた。副統をやったことで一年の時よりも違った感じの収穫祭であった。とにかく忙しかったように思える。けれどもそこにはいつも友達の手助けがあっ

た。同じ統一の仲間の助けがうれしかったと同時に、自身も頑張らなければと、気が引き締まった。忙しい日々の中で頭の中で考えていたことがあった。それは、来年、委員長になった時にこの統一をどうまとめたいだろうかというのだろうか?不安でいっぱいだった。しかし、そんな中でも少しずつ来年への希望もふくらんでいった。この年の収穫祭もまた、走り回っているうちに終わり、いよいよ、委員長交代になった。引退式で受け取ったあの時の法被の重さは今でも忘れることができない。その後、これから自分はどうしていけばいいのだろうか?委員長をつとめられるのだろうか?そればかりを考えていた。その答えはしばらくでなかった。春になっても・・・けれども、自分が委員長になったからには最後までやり遂げてやる!!やりきらなくては何も始まらない。そう自分に言い聞かせ、自信をもって収穫祭に臨んだ。今年も、準備などを含めて収穫祭、年に一度のこの農大の祭りをおおいにみんな楽しんでうではないか。

一人一人はもちろんのこと、みんなで楽しめるようにすれば一番よいのではないだろうか?そう思った。これを実現し、後輩たちに少しでもこの楽しさを多く感じてもらうと。

先生方も学生も、そして、来場者の方々も全員が楽しめるように自分らが出来る限りのことでベストを尽くそうと心に決めた。そして、いよいよ準備が始まった。

九月に入り、各部門ごとの準備も始まりだしみんなで顔を合わせる機会も毎日のようになってきた。自分は副統の

岡部と二人、会議や各部門の作業を手伝う毎日だった。毎日が楽しかった。作業をする中で悩むことも多々あったがそんな時でも誰かしらによって、笑いが絶えることは無かった。

月日が経つのは早いものであつという間に収穫祭当日を迎えてしまった。みんな協力し合い、3年目の収穫祭を無事に終えることができた。そして、体育祭も無事に二回目の幕を閉じた。

今年も、統一で自分が最後の年ということもあつて様々なことに力を入れてきたがその中でも言い合いになったことや考えさせられたことも多々あった。今となっては、自分も含め同学年の各部門の3年には、それぞれに悔いの残らないように自分のやりたいことを最後までやり遂げてほしいという強い気持ちがあったからこそ、そうやってしまったのかもしれない。

統一みんなでも一つになり協力してきたこの数ヶ月は、自分にとって決して忘れることのできない宝物である。自分が統一委員長として、今まで頑張ってきたのも良い仲間や頼りになる後輩達の支えがあったからこそだと思ふ。統一のみんなには心から感謝している。

あまり言えずにいたのでこの場を借りて感謝の気持ちを統一のみんなに伝えたいと思う。

山川・ヤスロー・あかり、家畜苑お疲れさま。新たな場所でも今までもやりにくかったにも関わらず自分の意見も取り入れてくれてありがとう。新しい畜統の家畜苑、すごくよかつたよ。

カズ・ジョージ・トモヤ、神輿お疲れさま。最初で最後のかつぐことのできた神輿が三人で先頭に立って創り上げた神輿で正直すくうれしかった。ありがとう。

アイ・アキナ、装飾そして全体アーチお疲れさま。二人の仲の良さそして、持ち前の明るさはみんなを笑顔にしたよ。言い合いになったこともあったけど二人の頑張りにはすく感謝しています。ありがとう。

マキ・ヨコ・シユコ、特企お疲れさま。特企全体で協力し合い、収穫祭当日も含め本場に忙しかっただろうけど、今年のステージ企画を楽しいものにしてくれてどうもありがとう。

じゅんこ、宣伝隊お疲れさま。一番早くから宣伝活動や会議などで飛び回りながらも収穫祭のため、そして畜統のために活動してくれてどうもありがとう。今年の来場者があんなにも多かったのはじゅんこ達の頑張りのおかげだね。ヨシ・平に、体育祭お疲れさま。応援合戦、うちら3年間のなかでラストが一番いい順位でよかったよね。最後まで一緒に応援合戦に出られたことに感謝します。ありがとう。

さやか、槽装飾お疲れさま。最後までどうしても悔いの残らないようにやり遂げてほしくてあの時は強く言ってしまったけれども、バッチリ槽を完成させてくれてどうもありがとう。最高だったよ。

二年生、最後までうちら三年のサポートをありがとう。みんなの協力がなかったらうちらは今までやってけることができなかったし、収穫祭も無事に終えることができなかった

ったと思う。来年はいよいよ統一でいられる最後の年、最後まで悔いのないように楽しみながら頑張れ。

一年生、今年は本当にいろんなところでよく手伝ってくれてありがとう。みんなの頑張りがあったからこそうちらも頑張ることができたよ。来年は今の二年をうまくサポートしていつてほしい。もちろん、楽しむことも忘れずに。

そして、来年度委員長である岡部には、この先、辛いことやきついと思うことがどれだけ待ち受けているかわからないが、みんなを理解し自分の信じた道を最後まで全力でつき進んでいつてほしい。頑張れよ。

みんな、最後までこんな自分に協力してきてくれて本当に今までありがとう。みんなと過ごした日々は決して忘れない。

早くも4回目を迎えた厚木の収穫祭は、まだまだこれから大きく発展する可能性を存分に秘めています。その可能性を実現させるのは、今、この『ふじみの』を読んでいるみなさん一人ひとりです。

最後になりますが、これからの厚木キャンパスの発展を期待すると共に、自分達、畜産学科統一本部並びに収穫祭・体育祭にご協力頂いた全ての方々から感謝いたします。

ステージに……

「ありがとうございました！」

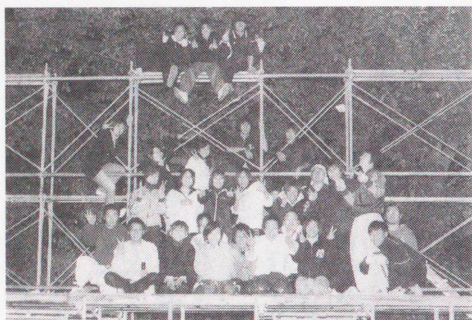
特別企画委員長

3年 浅野陽子

特別企画委員長の法被を渡されたとき、正直、どうしようって思った。あたしにできるかな？ほんとにこれでいいのか？って。最初の不安はその程度。だけど、収穫祭準備が始まって、法被を着る機会が増えた頃にはその不安は何倍にもなっていて、去年の委員長に法被を返しちゃうくらいだった。そんなこと死んでも言えなかったけど。言えなかったけど、きつと一番それをわかってたのは……やっぱり、去年の委員長だったと思う。いつともどうしようどうしようで最高に頼りなかつたと思う。けど、見捨てないでくれた彼女に最高に感謝してる。ついてきてくれた後輩にも感謝。一緒にステージをつくってくれた仲間にも感謝。ステージを見て、参加して、楽しんでくれたお客さんにも感謝。そして、あたしにちょっとした自信と責任感を与えてくれた特別企画つてもものに感謝する。もしも、ステージに立つことがなかったなら、あたしは何も変わらないままの自分だったと思う。

だけど、二年間特別企画としてステージを運営してきた終わったときに真っ先に思ったのは、「もう一度やりた

い」よりも、「終わってよかった」だった。ステージの横に立つと今までないくらいドキドキする。



大きな不安の中にちょっとした期待がまざったドキドキ。ドキドキの後にはステージとあたし達とお客さんが一体になったワクワクがくる。で、終わってほっとする。あのちょっとした期待のドキドキとワクワクが好きで、あたしはあそこをいたんだと思う。けど、それを感じるにはその何倍も苛立ったりとか凹んだりとか喧嘩したりとか呆れたりとか・泣いたりしなきゃだった。二年間で全てやり尽くしたとは言えないけど、けどもうあたしは十分ステージに満足した。十分楽しんだ。だから「終わってよかった」。

ほんと、「特企ステージありがとう」。

最後に・・飯田真希、五島惟道、横山祥子に心より感謝を申し上げます。3人がいたからあたしは委員長として何とかやってこれました。4人揃う時はあまりなかったけど、揃った時は最高に楽しかった。特に飯田は、喧嘩しながらもありえないくらい一緒にいてくれて本当にありがとう。五島と横山、来年は今年よりもっと良いものをつくれる力あるって信じてるから。頑張ってるね。

## 農大生!!

宣伝隊長

3年 石井 淳子

私は誰よりも農大が、そして農大生が好きです。畜産学科統一本部に3年間所属し収穫祭を作ってきた一員として胸をはって言える一言です。

私は今年、統一本部の宣伝隊長を務めました。宣伝隊は収穫祭に多くの方に来てもらうために、各地でピラや野菜、種子を配ったり、応援団の方に依頼して大根踊りを公開していただいたり、時には自分達で大根踊りを行います。宣伝隊の根本にあるのは「農大生らしく」です。歴代の先輩から受け継いだこのキーワードを第4回収穫祭宣伝隊の私達は、私達なりに解釈して宣伝活動を行ってきました。農大マーク入りの浴衣の上に背中にも農大とかかれた法被を着て宣伝活動を行うので、私達はある意味農大代表なのです!もしかするとイネや大根を話のネタにするのは農大のイメージを勝手に作っているのかもしれませんが。でも私はそんなイメージの農大が大好きだし、多くの方に知ってもらいたかったのです。収穫祭の宣伝にうまく利用してしましました。(今年は4年間で最高の来場者数だったわけだし、それでよかったですよね!)

今年は計12回の宣伝活動を行いました。それが、それに至るまでの準備は2月から始めました。沢山の会議をこなし、時



には隊員同士、言い合ってしまったこともありましたが、でもそれはよりよい宣伝を行うためのものでした。隊長となった今年是他のことより何よりも宣伝隊をメインにしてみました。9月、10月は朝方まで会議や資料作りを行い、皆効果のある宣伝を行おうと必死でした。ピラに配った場所ごとの印をつけて、当日持ってきてもらえれば記念品と交換する。そうすれば、どの宣伝活動が効果的なのかわかる。小さな子供に来てもらうために「お絵かきコンテスト」を行ったり、収穫祭当日野菜を配ったり・

今年なぜこんなに収穫祭にきて欲しいかといえば、過去2年間収穫祭を作ってきて、本当に多くの方が収穫祭を作っていることが分かったからです。統一本部や実行本部だけでなく、農大生一人一人がそれぞれの形で楽しんで収穫祭を作っている!!こんなに自分の学校のことを愛している学生が多い学校は他にはない、だからこそ沢山の人の収穫祭を見て欲しかったのです。宣伝隊は順位も結果も無い団体です。でも私は収穫祭当日、バスから降りてくる人の数を見て、これが私達の結果なんだと思いました。こんな1年間を宣伝隊としてやってこれたのも、宣伝隊本部の新井隊長をはじめとする宣伝隊のみんなのおかげです。中村君、薄井、ヌマジ、B君、しのぶ、ヤス、みっちゃん、ユミ、サトシ。みんなありがとう。

私の大好きな農大のなかでも、単人をはじめとする畜産学科統一本部の皆、本当にありがとう。みんなに会えて本当に良かった、畜産学科統一本部でよかった。

中でも一緒に宣伝隊としてやってきた2年生のユミとサ

トシ!! 気分屋で頼りない隊長でごめんね。2人がしっかりしてたから頼ってばっかで・ユミとサトシだからこそ来年は大丈夫! 農学パワーに負けじとガンバレ。

そして前年度隊長のトミさん! ピンチの時はいつも助けてくれて、美味しいお鍋もご馳走していただいていたありがたいです。まるでお母さんみたいでした。

時間が無く文展の準備を手伝えない私に嫌な顔一つせずに接してくれた家畜繁殖学研究室の皆さん、ありがとうございます。皆さんのおかげで農大生1人1人が収穫祭を作っていることに気がつきました。

そして、宣伝隊として最後に報告しておきたいことがあります。宣伝活動の中でも世田谷と合同の「経堂パレード」にて畜産学科統一本部の御輿は農大通り賞第3位という成績をおさめました。この御輿を作ってくれた御輿のみんな、本当にお疲れ様!! そして、ありがとうございます。なかでも、かず君、ジョージ、トモヤ。いつもいつも頼りない私を助けてくれてありがとう。御輿はもえても皆が一丸となったあの日を私は一生忘れないよ。

最後になりますが、第4回収穫祭宣伝隊を支えていただいた宣伝隊本部部長の栗原良雄先生をはじめとする参与の先生、並びに収穫祭実行各本部、農友



会各部の皆さんにこの場をおかりして御礼申し上げます。



## みんなの力

御輿隊長

3年 藤 沼 和 秀

9月の頭から御輿の製作を始めた。ある程度7月の終わりの時点でデザインは出来上がっていた。これを形に変えるだけだった。ただこの形に変えるという作業は1人では不可能であった。

今回、御輿を専門に作る人が5人と宣伝隊長のじゅんちゃん(石井 淳子)がいた。ジョージ(山本 健二)、ともや(賛田 智也)、まっちゃん(松本 直樹)、みう(三浦 隆雄)、後自分であった。この5人がいなかったら今回の御輿は無かったと思う。

御輿の絵を中心に作業をやってくれたともや、いつもジョーダンを言いながらもやる時はやってくれて今回の御輿を美しくかっこよくしてくれた。

御輿の組み立てをやってくれたジョージ、相当の強い御輿を組んでくれたと思う。又、兄貴肌でいつも悩んでいたところがあったらアドバイスをしてくれてそれがきっかけになり、つまっていた作業が進み始めた。自分が失敗してもジョージが「大丈夫だよ。なんとかなるって」と言ってくれた。この少ない一言だが本当に自分の気持ちを楽にしてくれた。

まっちゃんとみう2人とも「何かやることは無いですか

ね」といつも言ってくれていた。作業を頼んでもいやな顔一つせずやってくれた。今回自分がやった作業量より確実に2人の作業量の方が多かった。この2人の作業量によりかなり自分は助けられた。2人には来年も協力してやってほしいと思う。

自分らが御輿だけに専念して作れたのは、じゅんちゃんがんばって宣伝隊と御輿のことを両立してやってくれたからだと思う。こうした5人と体育館のミーティングルームに足を運んでくれた人達の助けがあったために、10月の頭に今回の御輿は生まれたと思う。

今回一応御輿の責任者という名前はあったがみんなが各場所責任を持って全力を注いで作業をしてくれてなかったから御輿は出来ていなかったと思う。今回の御輿の責任者はみんなであったと思う。今回の御輿作りは本当に最高のメンバーで作れたと思う。

最後に言いたい「本当にありがとう。ジョージともや まっちゃん みう じゅんちゃん 後御輿に携わってくれた人。」



## 懸命に

体育祭委員長

3年 菅原佳宏

自分がここまで体育祭の委員長をやり遂げることができるとは1年生の時には考えられなかった。

大学に入学してすぐの頃、自分は正直暗くて、人と話すのが苦手であったため大学はそれほど楽しいものではなかった。この畜友会に入ったのも自分から行けたわけではなく、先輩からの多くの誘いから恐る恐る行ったことから始まった。初めは当然周りの人はみんな知らなくて、喋りかけることもできずただ体育祭の応援合戦の練習を中心として先輩の指示通りに毎日、毎日夜遅くまでキツイながらもやっていた。一年の時は住んでいた所が厚木ではなかったため夜は会室に泊まり、授業を終えてから一度家に帰りそして夕方からまた学校に来て練習という、それまでの生活を一変させるこの日々がそれは自分にとって今までにない楽しさと毎日が新鮮であったためこのキツさも忘れてしまうほど収穫祭や体育祭に力を入れていたのである。そんな中で自分が少しずつ明るく、そして色々な人と話せるようになった。

2年になり、自分は迷わず体育祭をやることに決め副委員長を務めた。1年の時とは大きく違い今度は自分が教えらるる側から教える側に変った事により多くの苦勞を感じた。手探り状態の中ですべてを出しきった。そんな経験を生かし



た上で自分が体育祭の委員長として法被をもらった時はうれしさとすごく重みのあるものだと感じ、それとともに大きな不安でいっぱいだった。伝統のある畜産であることは1年生の頃からよく耳にしていただけに、そんな重役を自分が：なんて考えるのもしよっちゅうでした。やはりその予想は当たり、なかなか応援合戦の案を決めるのに時間がかかったり、人を集めるのにも苦勞した。

自分がこうして苦勞した事はかりをあげているが、実際は楽しいときの方がはるかに多いのであって、みんなと過ごす時間が今となっては大変貴重なものであった。ホント本番までの時間はあつという間であった。

今回の第一・二回体育祭では総合3位、競技3位、櫓裝飾4位という結果に加えて応援合戦3位という結果を取る事ができた。自分が1、2年と一番力を入れてやってきた応援合戦でよい結果を残せず悔しい思いをしてきたが3年生にして初めて賞状をもらった。その3位という結果にはホント多くの努力やみんなの支えがあったからだと思う。時には笑ったり、時には怒ったりしながらも練習で一生懸命やってきてくれたみんなの事を考え思い出したとたんにこらえきれなくなってしまう泣いてしまった。

自分が3年目の最後の年にこれほどまでの感動を味わえた事、そして最高の思い出を与えてくれたみんなに感謝しています。

## 畜産万歳！

櫓裝飾委員長

3年 飯塚さやか

ここでいう「櫓（やぐら）」とは何か。それについてはこの冊子に載っている収穫祭・体育祭の事業報告の櫓裝飾の欄を読んで頂きたいのだが、そのやたら大きい絵を披露するのは世田谷キャンパスのグラウンドである上、なぜか毎年人目につかない場所（今年度は体育館下）が作業場所に指定されたことも手伝って、なかなか厚木の学生には馴染みのない部門である。そして私はその長を二年間、誇りを持って務めた。

その櫓は採点されて順位が決まり、それは体育祭の総合順位にも関わるというもののだが、今回は「夢見るコブタ」を描き、なんと15学科中4位!!だった。世田谷からの反響もあったし去年の順位と比べても自分では結構満足している。しかも、3位の生物応用化学科の一、〇一一点と1点差の一、〇一〇点での四位だった。あとほんの少しで3位：・トロフィー!!と思うとかなり悔しいが、それでもこれだけ満足できたのは、今回も前年度の闘牛に引き続き畜産学科らしいものが描けたし、去年とはまた違った、そして兼ねてから自分の中でネックになっていた「立体」に手を伸ばす事ができたからだろう。やはりどうしても厚木の学科には距離というハンデがあるのだが、それを乗り越え

て豚の絵に立体のブタツパナとミラーボールをとりつけることができたので、畜産学科の存在感を十分アピールできたのではないかと思う。

しかしその槽も、勿論すんなりと出来上がったわけではなかった。思えば今回も前年度以上に人を巻き込んでしまった。先輩の話によると毎年の事だそうだが、途中まで少人数制で、最後になって皆の手を借りる。今年もご多分に漏れず、最後に多くの人の手を借りまくった。途中まで自分が豚の絵の部分に精一杯な上、他のメンバーもそれぞれの仕事に追われていることもあって、立体部分にかかる時間が極端に少なくなってしまう、パネルを搬出した後の一週間に作り上げる形になってしまった挙げ句、徹夜をしても搬出当日になっても出来上がらず、世田谷に運んでからそれらを作り上げ、前夜祭にも間に合わないという不測の事態に陥ったりした。それなのに畜産学科統一本部の仲間達は嫌な顔ひとつせず、よく私に手を差し伸べてくれたと思う。本当に感謝している。中でも搬出の数週間前になってから槽前面中央の鳥の絵を頼んだ賛田智哉君、妥協の道に走りそうになっているところを我に返らせる一言を言ってくれた統一委員長の隼人、そして最初から最後まで私の個人プレーにつきあってくれた次期槽裝飾委員長の内美、本当にありがとう。みんなみんな、ありがとう。少々クサイと思うが、これが仲間なんだなあとしみじみ感じってしまう。あの槽は私達全員で作りに上げたものだから心から思う。

私は三年間畜産学科統一本部に所属し、二年間槽裝飾を

## 裝飾ギャルズ☆

裝飾委員長

3年 尾茂田 明 菜

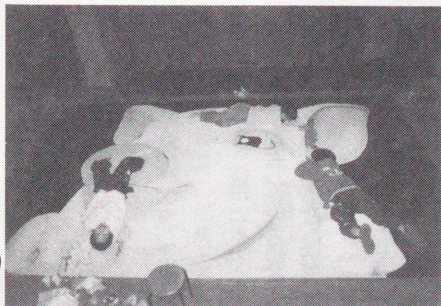
15メートル×15メートル、これが今年私たちが裝飾に使用したブルーシートの大きさです。今年こそ雨にも負けず風にも負けないものを作りたい！そんな思いから思いついたのがブルーシートでした。しかし、今までとは違うものでやるためうまくいくかどうか分らず不安でいっぱいでした。そして、初めてブルーシートを広げたときは、あまりに大きくてできないんじゃないかと思ってしまうくらい。でも、最後まで、体育館の下のすばらしく寒い場所でも明るく一緒にがんばってくれた裝飾ギャルズみんなのおかげで設置日の前日のぎりぎりまでかかったけど無事完成することができました。そして設置に手伝ってくれた皆さん本当にどうもありがとうございました。とつてもとっても助かりました。みなさんの協力のおかげで今年初挑戦のブルーシートでの裝飾がなんとか成功し、私にとって三年間で一番心に残るものになりました。

愛ちゃん、一緒に裝飾をやってくれてありがとうね！ほんとは収穫祭までの1ヶ月間いろいろあって泣いたり悩んだりもしたけど楽しかったよ。

なほ、今年はたくさん無理させてごめんね。なほにいっぱい助けられたよ。本当にありがとう！そして来年はなほら

担当できて本当によかった。一年の時にそれぞれの部門を手伝い、中でも家畜苑に力を入れる事ができてよかった。先輩にも恵まれた。後輩にも恵まれた。同学年の仲間達にも恵まれた。皆で一つのことを目指して協力する事で、強い連帯感を感じた。達成感を感じた。収穫祭の時期は毎年忙しかったけれどとても楽しかった。この団体に所属していなかったら自分の大学生活は相当変わっていたことだろう。

最後に、お忙しいところアドバイスを下さった祐森先生を始めとする諸先生方、文展が大変だというのに理解を示して下さった家畜繁殖学研究室の皆様、本当にありがとうございました。



しい楽しい裝飾にしてください。楽しみにしています!!私の力になれることがあればいつでも喜んでね。

最後になりましたが、顧問の門司先生、萩原先生を始めとする先生方、林さんを始めとする職員の皆様のお陰で無事設置でき、収穫祭3日間何事もなく飾ることができたことを心から感謝しています。いろいろ至らない事もあり、迷惑をおかけしたと思いますが最後までご指導いただきありがとうございます。

3年間一緒にやってきたみんな今年の裝飾ギャルズはわがままばかりでたくさん迷惑をかけたと思うけど何かと助けてくれてありがとう！

最後の最後に一言！来年も裝飾ギャルズ☆をよろしくお願ひします。



# 家畜苑

家畜苑委員長

3年 山川 将弘

「山川、家畜苑やってみないか？」先輩から言われたこの一言が自分の3年間を大きく変えた。こんなことを言うと非難されてしまうかもしれないが、自分の3年間は勉強より、授業より、何よりも畜産学科統一本部であり家畜苑であった。何故こんなにも家畜苑にのめりこんでしまったのだろうか？収穫祭期間の2日間、お客さんや学生に家畜を見せるだけなのに。正直言うと自分にも分からない部分が多い。最初から明確な目標を持っていた訳ではないし、家畜苑に関わっていくことに疑問を感じることもあった。

しかし確実に言えることが1つある。3年間すごく楽しかった。お客さんの笑顔を見るのも、子供が喜んでくれるのも、仲間と作業するのも、家畜と関われるのも、全てが楽しくてしょうがなかった。これが自分の3年間を支えてくれたのだろう。

「家畜苑委員長 山川将弘」これが3年になっていただいた肩書だ。委員長になった時はその重圧を感じたが、特に変わったものもなければその後重荷に感じることもなかったし、むしろこの立場を利用してやろうと意気込んでいた。

自分が委員長になってやろうとしたこと、それは、家畜苑は動物園ではなく「家畜」苑なんだ、ということだ。今まで

の自分もそうだったのだが、肉や骨や皮を「商品」としてだけしか見ず、元々自分たちと同じ動物なんだという感覚が薄れている傾向が日本国内にはあるように感じる。このことは畜産においてタブーなのかもしれないが、それでも単なる商品ではなく動物の命を犠牲にして初めて得られるものなんだと知ってほしい。みんなの前にいるのはただ「かわいい」だけの動物ではなく、普段くちりにしている、身に付けている物のために犠牲になる家畜なのだ。このメッセージを何とかして伝えたかった。

結果としてこのことが伝わったかどうか疑問であるし、そのために行いたかったことのほとんどを行っていくことができなかった。

しかし、このようなことを考えられるようになったのも家畜苑のお蔭であり、家畜苑での3年間は自分を大きく変えてくれた。そして何よりも仲間たちと過ごした楽しい時間はかけがえのないものであり、本当に充実していた。

この3年間、農大生の中で誰よりも充実していたのはこの俺だと言いたい。本当に家畜苑に関わってくれた。統一本部に入ってく



## 編集後記

「ふじみの」も今年で記念すべき第40号を発行することができました。平成10年に厚木キャンパスへ学科移転が行われ農学部独自の雰囲気を作られました。本年度は学生達の念願であった体育館が設立され、入学式、卒業式を行うことができました。

また厚木キャンパス収穫祭も第4回目を大成功に行うことができ着々と伝統が出来つつあります。

この「ふじみの40号」が、今後畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この1冊を発行するに当たり、お忙しい中原稿を書いて頂いた先生方、ならびに会員の方に深く御礼申し上げます。

編集委員代表 石井 淳子

平成16年 3月20日 発行

“ふじみの”第40号

ふじみの執行委員 石井 淳子  
横山 祥子  
山口 奈穂

神奈川県厚木市船子1737  
発行者 東京農業大学畜友会  
電話 046(270)6228

神奈川県厚木市栄町1-15-15  
印刷所 有限会社 藤野印刷所  
電話 046(221)3029





